
封印の門

冬泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印の門

【Nコード】

N60660

【作者名】

冬泉

【あらすじ】

その異空へと通じる門は、大きな犠牲と共に確かに封印された筈だった。しかし、それでは何故、国を悪鬼が跋扈しているのだろうか？ ジョフ大公国のレアラン姫は、“大戦士”グランと仲間の冒険者達の力を借りて、漸く復興なった祖国に再び襲い掛かろうとする闇の勢力に立ち向かうのだが・・・。

（拙著「遙かなる望郷の地へ」のリメイク版です。旧作に追いつくまで、旧作はそのままにしておきます）

封印の門 - 00 「主要登場人物紹介」

あらすじ

“封印戦争”の際に強大な闇の勢力に全土を蹂躪され、失地となっていたジヨフ大公国（Grand Duky of Geoff）ですが、“大戦士”アルフレッド・グレンツェフ（グラン）をはじめとする冒険者の一団の尽力によって大公女レアラン姫が救出され、“闇の彼方への門”を封印する事により国から闇の勢力を追い払い、再びジヨフ大公国の復活を見ました。

漸く安寧が訪れたかのように見えたジヨフ大公国に、新たなる試練が襲いかかります。“水晶の霧”山脈より、強力なオークレイダーが国に來襲してきました。再建途上のジヨフ大公国軍にコーランド王国からの援軍を併せ、グランと冒険者達は大公女レアランを助けて、国を護る戦いに着手します・・・。

現在の主要登場人物

レアラン・ルーフィウス・ラ・ジヨフ 「Learan Lofious la Geoff 171cm/A」

ジヨフ大公女でジヨフ大公国の主権者。グランの婚約者でもある。ジヨフ飛翔騎士連隊を直率し、自らもWIND SHEED“疾風”に乗る。

アルフレッド・グランツェフ 「Alfred Granzeff 200cm/O」

通称「グラン」。ジヨフ救国の大戦士にして、レアラン大公女の婚約者。秘剣“剛烈剣”を継承し、天の剛剣“チーフテン”を帯び

る。

エリアド・ムーンシャドウ 「Eriard Moonshadow 186cm/O」

。「創世の魔剣」と呼ばれる『阿修羅』を帯びる“魔剣士”。レムリア姫のパートナー。アーサー・アートルム国王救出の功により授与されたヴェロンディ連合王国の自由騎士位（Free Knight）を有する。星々と放浪者に加護を与えしセレスティアン（Celestian）神の追隨者にして 数少ない聖戦士の一人。

マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ 「Margaret Lemria of Velondy 162cm/B」
ヴェロンディ王アーサー・アートルムの妹姫で“夢見”の力を持つ。黒髪に黒い瞳が抜けるように白い肌に栄える絶世の美女で通称“夢見姫”と呼ばれる。“魔剣士”エリアドのパートナー。ヴェスベの森の守護の剣『タイン』を帯びる。

ノエル・ラ・フォーム・ヒラリオン（ヒラリー） 「Noel La Form Hilarion 177cm/A」

守護者（WARDEN）の一人で、“紫の騎士”と呼ばれる。封印戦争後、七人の守護者の内只一人エルスに留まり、平和と正義を守る孤独な戦いを続けてきた。不器用なせいか、生真面目で融通の利かない行動を取るが、その実慈愛と優しさに満ちた性格をしている。時空を超える聖剣『フォウチューン』を帯び、その剣の腕も確かである。白皙の肌に明るいエメラルド色の瞳を持ち、長い金の髪は常に頭上に高く結い上げている。その冷静さから、冷たいとも思われる美貌だが、その実非常に血が熱く、情が深い女性である。

ディンジル・ルードロフ 「Dingile L・Droix 188cm/B」

守護者（WARDEN）の一人で、“黒の剣聖”と呼ばれる。“紅の勇者”と呼ばれるランバルト・ラ・スールと甲乙付けがたい剣技を有する、エリスでも最高峰の剣の使い手の一人。ヒラリーを庇って一時間に支配されていたが、ヒラリーの不断な想いで“眠れる街イス”より復活する。現在の不真面目な性格は、その時の後遺症と嘯いている。

ジャンニ「Giannni」

妖精族の魔法剣士。様々な呪文と小道具を操る。未来から時を越えてこの時代に飛ばされて来た様だが・・・？

カイファート・ジーニアス・ケルヴィン「Cayfarte Genius Kervin 192cm/O」

ジョフ大公国宰相。先代公主の親友だったが思想の違いから袂を分かち、一時は闇に染まり、ジョフを支配していた。大公女レアランによって許され、その庇護者となる。近隣に鳴り響く程の非凡な政治的手腕の持ち主。

レオン・“ロック”・ジャン・バルト「Leon”Rock” Jean Bart 186cm/A」

ジョフ親衛騎士隊（LAG）隊長。“ロック”というのは、戦場で付いた渾名である。大公女と大戦士には忠実無比の騎士である。

トリアノン・レスコー「Trianon L'Escort 177cm/A」

長い黒髪に黒い瞳、細身で長身の女性騎士で、コーランド近衛騎士ギヤルド、コーランド北遣軍司令官。コーランド王朝で24騎にしか与えられていない、ギヤルド・シュヴァリエ（近衛騎士）の位を女王から拝命している逸材。王朝でも名家であるレスコー家三姉妹の長女。因みに次女がオルセーで姉同様近衛騎士、三女がシュノンソーで騎

士見習いである。

ルージ・デ・ラ・ポルタ 「L u g i D e L a P o r t
a 190 c m / O」

コーランド近衛騎士にして、コーランド重騎兵第二連隊隊長。かの高名な鉄公爵（アイアンデューク）、騎士団領を治めるセバスチアーニ・デ・ラ・ポルタ公爵の長男。

イアン・サツコウ 「I a n S a k k o 189 c m / A」
伝説に唄われる三騎の龍騎聖の一極。あらゆる剣技に通じ、「剣のサツコウ」と呼ばれている。礼儀を重んじる仲間思いの勇敢な剣聖。少し性格的に頭が固い面がある。

ハロルド・ネースビー 「H a r o l d N a s b y 199
c m / O」

伝説に唄われる三騎の龍騎聖の一極。あらゆる槍技に通じ、「槍のネースビー」と呼ばれている。あまり感情を表に出さない無口な巨漢だが、非常に優しい心を持つ。

エスター・シトール 「E s t e r C i t a u l e 180
c m / B」

伝説に唄われる三騎の龍騎聖の一極。あらゆる弓技に通じ、「弓のシトール」と呼ばれている。龍騎聖唯一の女性。“心で風を読む”と言われる程の弓の名手。意外にも家庭的で、遠征時には調理も担当する。長い金の髪に、コバルトブルーの瞳を持つ。

??? 「??? 188 c m / ?」

“放浪の戦士”とか“シレイナス”とか“サリアン・リパニアン”等と自称（？）する人物。

マイラム・トランター 「Miram Tranter 179 cm/O」

ジョフ軽騎兵第四連隊隊長。機転と機微を備えているが、やや型破りなところも。

フレム・リュティエンス 「Frem Luetjens 188 cm/A」

ジョフ装甲騎兵連隊隊長。生真面目な性格をしている。

アルノ・カリスタン 「Arno Kalistan 183 cm/B」

ジョフ親衛騎士隊“L・A・G.”副隊長。非常に礼儀正しく、丁寧な人柄である。

レジナルド・ツイーテン 「Reginard Zieten 175 cm/AB」

港町グラッドサル出身。のんびりしている性格ながら、これでもコーランドが誇る近衛騎士でレスコー司令官代行。^{ギャルト}

アマン・トゥーロン 「Amman Touron 196 cm/A」

コーランド重歩兵第三連隊隊長。

フィリップ・コルベル 「Philipp Colbert 191 cm/O」

コーランド軽歩兵第六連隊隊長。幾多の戦いを生き延びた歴戦の獵兵からの叩き上げ。

カレン・ケイスナルド 「Karen Kaysnarde 177 cm/A」

コーランド軽歩兵第八連隊隊長。女性ながらコーランド軍最年少の連隊長である。巧みな戦術指揮で知られている。

追記

この小説の原文体は、参加者が交互に書き込む対話形式で書かれています。その為に人称が時に変わるために読み難い面もあるうかと思いますが、平にご容赦願います。

また、本文の掲載に同意頂いたグラン大尉、えりあど氏には、この場を借りて感謝申し上げます。

封印の門 - 01 「光なる紫の騎士」

ジヨフ大公国 / 宮殿 / 客室 大広間

頬を撫でる涼風を感じ、その女性はそつと目を開いた。肩口より大分長い薄い金の髪に、鋼の如き蒼い瞳。整いすぎるほど整った表情には笑みも愛想の欠片もない。この女性はノエル・ラ・フォーム・ヒラリオン。『紫の騎士』と呼ばれている“エリスの守護者”（Warden）の一人である。

開いた窓から、楽しげに啼く鳥の声が聞こえてくる。軽く頭を振ると、少し高めの寝台から降りる。天蓋もない質素なものだが、華美でないところが良いと感じていた。

「今日も、良い天気になりそうだな。」

窓から眺めると、真っ青な秋の空が広がっていた。あてがわれた部屋は東向きの為、地平の彼方に上がる太陽が目に眩しい。余談だが、ジヨフ大公国の首府はゴルナの宮殿で主要な部屋は全て東面か南面に面していた。これは、この国の人々が西と北からの潜在的な脅威を重く感じているからに他ならない。

軽く溜息を付くと、ヒラリーは窓辺を離れ、徐に夜着を脱ぐと寝台の上に置いた。細い、華奢な軀には、過去の激戦を暗示するような、幾つもの傷が付いていた。常に、最も厳しい戦いの場に身を投じてきた『紫の騎士』ならではのものなのだが、微かに眉を寄せると、暗い考えを吹っ切るように壁に掛けてあった服に手を伸ばす。

「過去の思い出に、心を悩ましていても仕方がないだろう？」

白をベースに紫の複雑な模様が踊る上着の袖に手を通しながら、

ヒラリーは一人ごちた。結局、ディンジルが納得してくれればいいのだ。とそこまで想った時、不意にとても恥ずかしくなって頬が紅潮する。

「わたしは、一体何を考えているのか？ やれやれ、随分と軟弱になっちゃったものだ」

溜息を付くと共に、腰に剣帯を巻く。細身の宝剣、切っても切れないパートナーの聖剣『フォウチューン』を剣帯に引っかけると腰に下げた。ふと、思い立ってその柄に手を当てる。

「お前も、わたしのこんな考えを笑うか？」

あなた
貴女さえ満足ならば、何に異を唱えることが有ろうか・・・

そんな想いが、笑みの波動と共に伝わってくる。思いも掛けないパートナーの返事に苦笑しながら、ヒラリーは姿見で自分の格好を確認すると、部屋をでた。

客室をでると、長い廊下を歩いてゆく。他の仲間も、自分が泊まった部屋に並ぶ客室に泊まっているはずだが、物音一つしない廊下にヒラリーの拍車の音だけが響く。突き当たりの階段を下りると、階下に待っていたこの国の騎士に案内され、大きな広間に入った。両側と奥に窓があり、真ん中に大きな檜のテーブルがあり、その周囲を十二脚の木の椅子が取り囲んでいた。

「わかった。ここで待てば良いのだな」

実直に礼を返す騎士にそう言うと、ヒラリーは窓辺に立って青い空と遠くに霞む山並みを眺めた。

封印の門 - 01 「光なる紫の騎士」（後書き）

物語の舞台はイースタン南西部、コーランド王国の更に西に位置するジョフ大公国です。あらずじにも有ります通り、“封印戦争”の際にモンスターに全土を席卷されて“失地”となっていたこの国は、コモン歴590年に冒険者の力を借りて復興します。しかし、ジョフがその安寧を得るのは、まだ先のことでした・・・。

封印の門 - 02 「破邪の魔剣士」

ジヨフ大公国 / 宮殿 / 訓練所 大広間

エリアド・ムーンシャドウ 『阿修羅』を帯びる“魔剣士”と言った方が一般には判り易いのだろうが は、ジヨフ大公国が首府ゴルナの王宮の庭で鍛錬に勤しんでいた。

コーランドにて漠羅爾^{バクラニ}の宝刀『震電』の奥義“重破斬”を見出し、以来、日課には“気”の鍛錬とも言うべき、新たなメニューが加わっている。『震電』の剣尖唯一点に集中した“気”の力を解放することなくそのまま維持し、剣の刃の上を移動させる。そのくり返しのよって“気”をより長く持続させ、自在に制御する術^{すべ}を会得する。

ある意味、直線的に作用することが多い“雷”の力を持つ『雷電』と異なり、『震電』の持つ“重力”の力は、自在に制御することができる、より大きな可能性を秘めているように私には思えた。同時に、ともに制御できなければ、危険極まりない“力”となるであろうということも・・・そして、こうした“気”の制御は、『雷電』にとっても、新たな“力”を見出すきっかけになってくれるだろう。そのためにも、こうした日々の鍛錬は欠かせない。

そう、私の目指すものは、いまだ遙か彼方にある・・・。

「・・・そう簡単にはうまくならぬな。・・・が、まあ、焦っても仕方あるまい。」

「・・・少し早いが、行くとするか。」

呟くように言って、二振りの剣を鞘に収める。

「……ふう……」

精神を統一するように深く息をする。

そして、緊張した身体をほぐすように拳法の構えを取り、ゆつくりとした左右の連突きから、左足を軸に反転して右の回し蹴り。そのままくりと一回転して、流れるように一連の動作を終えると、以前よりだいぶ短く切っている髪をかき上げる。

「……良い天気になりそうだ。」

真つ青な空を見上げ、しばし彼方に想いを馳せる。

「……そう。旅はまだ、終わらない……。」

小さく呟くと、私はゆつくりとした足取りで大広間へと向かった。

待っていた騎士に案内され、大きな檜のテーブルの置かれた大広間へと入る。まだ誰も来ていないだろうと思っていた大広間には、すでに先客がいた。

「……おはよう。」

……あいかわらず、早い……な。

窓辺に立ち、遠くの空と山並みとを眺めていたヒラリーに、私はそのように声をかけた。

封印の門 - 02 「破邪の魔剣士」 (後書き)

「魔性の瞳」の主要登場人物の一人、エリアドの登場です。「魔性」から六年過ぎ、彼も多少は丸くなってきた・・・でしょうか？
・・・余り変わらないかも知れませんね（笑）。

封印の門・03 「創世の魔剣」

ジョフ大公国／宮殿／大広間

「・・・エリアドか。」

声の方に視線を振ると、旧知の顔を見つける。礼を失しているという訳ではないのだが、些か素っ気なくさえ思える朝の挨拶も、ヒラリーにとっては普通の態度だった。

「姫君は、一緒ではないのか？」

エリアドのパートナーであるレムリアの姿はまだ無い。

「・・・彼女なら、たぶんもう起きていると思うが・・・、私は・・・」

エリアドは腰に下げた二振りの剣の鞘を軽く叩いて、

「・・・裏にある訓練場に行っていたのですよ。」

そのように続けた。

「奇遇だな　こちらの寝坊助もまだ高寝だろう。」

ヒラリーは視線を窓の外に戻した。ヒラリーの視線につられるように、エリアドも窓の外の景色に視線を移す。

・・・天の蒼穹の下。そこには『水晶の霧』クリスタルミストの峻険な岩肌が聳え立っている。遠くに見える青みがかった山並みは、魑魅魍魎が跋扈

する非常に危険な山脈だ。

思ったより近くに感じるその魔の山並みは、冷厳と聳え立っている。

「あの山並みの彼方には、何があるのだろうか・・・」

何気なく漏れたその言葉に、ヒラリー自身も意外そうに首を傾げた。

「・・・知っている、ですね。」

やはり・・・と言っべきか。彼女の答えに、エリアドは内心静かな確信を得ていた。

エリアドのヒラリーを見る瞳には、些かの揺るぎもない。

ふと、思い立ったが様に、エリアドの翳した手に虚空から一振りの剣が現われた。優美な曲線を描く灰色の簡素な鞘に収められた一振りの太刀。

「・・・貴女なら、知っていると思うが、この“阿修羅”は、そこで造られた　いや、創られた、と言っべきか・・・。」

エリアドはゆっくりと言葉を紡いだ。

「・・・私が、真の意味で“阿修羅”のパートナーとなるために、“いつか、絶対に”行かなければならないところ・・・だ。」

「行かねばならない」、か・・・」

エリアドの声音に決意の響きを感じると、漸くヒラリーの表情から硬さが和らいだ。

「“聖地”を目指すので有れば 単なる決意や衝動だけでは不足だ。己の中に、確固たる“何か”が無ければ、辿り着くことさえも叶わぬ。」

ヒラリーの澄んだ双眸は、遠くに霞む“水晶の霧” 山脈の彼方に、何を映しているのだろうか。そして、その表情に哀しみの色が浮かんでいるように見えるのは、気のせいなのだろうか。

「・・・決意や衝動だけではない、確固たる“何か”ですか。むしろ、それだけの覚悟をしているつもりはあるのですけれどね。」

エリアドは小さく微笑^{わら}った。

「・・・けれど、貴女^{あなた}の口から、あらためてそう言われてしまうと自分の覚悟がそれにふさわしいものかどうか。今一度、自分に問いかけてしまいますね。」

少しだけ間を置いて、エリアドは続けた。

「・・・まあ、いくら考えたところで、人はその時の自分以上のものであることはできないのですし、その時々に行えることを積み重ねていくしかないでしょうけれど。」

「・・・それに。少し考えたくらいで変わってしまう程度の“想い”ならば、最初から持ちはしないでしょうしね。“時”至れば・・・おのずと答えは出るでしょう。」

遙かな西の彼方に想いを馳せる。翳した手の中から、スツと音もなく“阿修羅”が消える。

「・・・まあ、難しい話は、このくらいにしておきましょう。今の私にあるのは、“いつか必ず、かの地に行かなくてはならない”という想いだけで、そのための方策も、ともに目指そうと言ってくれる仲間も、そして、そこに行く具体的な術も、何一つありはしないのですから。」

・・・けれど、少なくとも、貴女は あなた いや、貴女方は あなたがた・・・なのかもしれないが かの地に行ったことが いや、行こうとしたことが ある・・・それがわかっただけで、よしとしておきましょう。」

なかば呟くように続けて、エリアドはもう一度、小さく微笑った。

「・・・おや。みなさん、着いたようですね。」

ギイという音とともに、広間の大扉がゆっくりと開く。

そして・・・。

「・・・おはようございます。」

エリアドは軽く会釈して、ヒラリーと共に入ってくる面々を出迎えた。

封印の門 - 03 「創世の魔剣」（後書き）

ジヨフ大公国は、コーランドへ通じる東側を除いて、周囲を山脈に囲まれています。得体の知れない魑魅魍魎が跋扈する危険地帯で、腕の立つ熟練の冒険者でさえも尻込みする地域です。

封印の門 - 04 「偉大なる戦士」

ジヨフ大公国／宮殿／大公爵の居室 廊下

あれから数日は経つもののグランは寝不足が続き、朝の気分というものは決して良いものでは無かった。原因は、式典やら会議で剣技の修練や愛馬との遠乗り等の時間は全く無く運動不足が一つにあげられる。

また、レアラン姫とすら公時の時くらいしか中々会えないのも苛立ちの原因に上げられる。そして最大の理由は生まれてこの方、政治や財政など、その方面に縁が無かった本人が、広いベットのの中で「悩み」という名の羊を延々と数え続けていたからであつた。

堅苦しい国政を論ずる会議にも精力的に参加しているのも「あの馬鹿が出来ているなら俺に出来ないはずが無い」と幾人かの古くからの知り合いの顔を思い出していたからであつた。

しかし、皮肉なことに会議の席ではベッドの中とは違って睡魔の猛烈な攻勢に辟易しているのも事実で、いつそのこと会議は夜に行うことと奇妙な意見を出したくもあつた。それでも本人の気苦労をよそに、本人以外の活躍で会議は予定通りに進むのが通例となっていた。

その中で、グランが唯一口を挟んだことは「公正な税制と公正な裁き」だけであつたかもしれない。本人が一番必要と考えていたのは、固有の戦力であり、危険極まりない辺境の地で、早い段階で常備軍を組織し独力で警備してこそ、真の自立と考えてはいる。だが理想と現実は何百マイルの差があり、武力と言う前にすることは山

積んでいた。

そんな事を繰り返しながら・・・また新たな朝を迎えた。時間だけは全ての生きる物に公正に与えられているはずだが、その意見には当の本人は全く納得しないかもしれない。

「何か間違えてないか??」

浅い眠りから覚めるつど毎回湧き上がる疑問である。本人が望んだわけではないが、やたらと大きな部屋に独り寝には大きなベッド、本当に目が覚めるとそこは薪の燃え尽きた野宿の野营地では無いのかと思うことすらあった。

「くそつたれ、もう朝か!」

とてもこの部屋の客人とは思えない苦言をもらったものの、何が変わるでもなく、諦めた様子で身支度を始める。本人は、こんな御大層な身分より地獄で悪魔を張り倒していたほうが、余程気楽だったであろう。それでも、あまりに無様な様子では姫に迷惑も掛かるであろうと精一杯我慢しているグランであった。

部屋を出て大広間へ向かいかけたが、ふと足を止めると方向を転じた。今朝は何時になく早起きしてしまった事もあり、先に気になる人物の迎えに行くことにしたのであった。だが、目的の部屋に到着する遙か手前で用件を達することになる。幾人かの付き人に囲まれながら、こちらに向かうレアラン姫の姿を確認したからである。その顔にはうつすらと疲労の色が確認され、痛たたまれない気持ちに苛まれる。

「まったく、英雄だなんだと言われていても、彼女の気苦労のひとつ

つも減らすことは出来ないとはな・・・」

半ば口の中で漏らすと、大またで歩を進めた。

「姫、おはようございます。」

ちよつと他人行儀かと感じつつ、他人の手前でもあり無難な選択をした積りであった。

「少しお疲れのようだが・・・俺に出来ることがあつたら遠慮なく言つて欲しい。」

次に出た言葉は、掛け値なしの思いであった。

封印の門 - 04 「偉大なる戦士」（後書き）

アルフレッド・グランツェフ（通称グラン）は、「魔性の瞳」に出てくるテッド・グランツェフの一人息子です。父親に似てがっしりとした体格で、「天の騎士」位を有しています。冒険者の仲間内では“最強の戦士”の誉れが高い漢です。

封印の門 - 05 「麗し的大公女」

ジョフ大公国／宮殿／大公女の居室 廊下

レアランの寢覚めはあまり快適とは言えなかった。国の再興以来、休む間もなく陣頭に立って復興を指揮してきた。その成果もあって、混乱の極みにあったジョフ大公国に、徐々に秩序が戻ってきていた。

レアラン・ルーフィウス・ラ・ジョフ。辺境の小国であるジョフ大公国の主権者である大公女。豊かなブラウンの髪に明るい褐色の瞳のこの娘は、先の大戦（“封印戦争”）でジョフ公家に残された唯一の血筋である。まだ若干十八のレアランは、闇の束縛から解放された後、同様に生き残ったジョフの民を導いて国の再興に努めてきた。

でも、わたし独りだったら、とてもここまでおぼつかない・・・

陰に日向に、自分を支えてくれる異丈夫の戦士。慣れぬ会議に色々な気苦労もあるでしょうに・・・。

それでも、音を上げることなく木訥に自分の役割を果たそうとしてくれている。

質素なドレスに袖を通しながらも、レアランは気を引き締めた。この部屋を出たら、迷いを見せてはいけない。この部屋をでたら、毅然とした態度で振る舞わねばならない。それが、大公女たる自分に与えられた使命であった。

部屋を出ると、扉の前で待っていた近衛の騎士二名と女官に付き

添われ、レアランは大広間に向かった。途中の廊下で、見知った顔を見つけると思わず笑みを浮かべた。

「おはようございます、大戦士さま。一緒に大広間までゆきませんか？」

そんなレアランの挨拶に対して、大いに慌てる偉丈夫がここにした。

「だい・・・戦士？」

情けない小声で反応したグランは、大いなる困惑の色をその無骨な表情に見せながらも、土壇場で立ち直った。

「姫、おはようございます。少しお疲れのようだが・・・俺に出来ることがあったら遠慮なく言って欲しい。」

グランの指摘に、レアランははっとなった。

そんなに疲れた表情を表に出してしまっていたのだろうか。もっと気持ちを引き締めなければいけない。レアランは唇を固く引き結ぶと、その表情に笑みを浮かべた。

「ご心配をお掛けしてすみません・・・」

少し凹んでしまうレアランに、慌ててグランは笑って言った。

「俺も今朝は寝起きが悪かった。お互い様ですよ。」

そう言いながらも、グランは内心は複雑な想いだった。自分の言

葉が余計であつたかも知れない　不安を表に出すまいと頑張るレ
アランに対して言い知れぬ物を感じていたグランは、自分の軽率な
言動を後悔していた。

そんな思いを内に秘めながら、グランはレアランと一緒に大広間
に向かった。

一緒にいられる、この些細な瞬間が永遠に続くならば　グラ
ンは本気で願った。

だが、ふと思う。一度ならず、彼女は奴らに利用され危険な目に
苛まれ、一人苦しめられてきた。あの時はこう思った。万が一のと
きは、神だろうが悪魔だろうが、生きていることを後悔するような
目に遭わしてやる、と。

だが・・・そのとき俺は俺であることが出来るのであろうか・・・

珍しくも思考に沈降しているグランを、レアランは心配そうに
見つめていた。そんな時、二人に澄んだ声が呼びかけた・・・。

封印の門 - 05 「麗しの大公女」（後書き）

グランのパートナーであるジョフの大公女、レアラン姫登場です。まだ年若い娘ですが芯は強く、闇に捕らわれていたにも関わらず、強い心でそのトラウマを乗り切っています。唯一の大公家の跡継ぎとして、ジョフ大公国民から絶大の支持を受けています。

封印の門 - 06 「叡智の夢見姫」

ジヨフ大公国／宮殿／廊下

「おはようございます、大公女殿下、大公爵殿下。」

声の方に向くと、華奢な女性が廊下を歩いてくるところだった。

漆黒の髪を肩口で切りそろえ、その黒い双眸が深い輝きを宿している。中原の“夢見姫”の名も高い、マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ　ヴェロンディ連合王国の姫君にして、“魔剣士”エリアドのパートナーである。

「おはようございます、レムリア姫さま。」

レアランは、この理知的な女性を逢った時から好きになっていた。その落ち着いた雰囲気、優雅な物腰、柔らかい話し方、優しい心遣い　何をとっても、自分が敵わないものばかりだった。

それでいて、非常に腰が低い　イースタンでも有数の高貴な身分の出でありながら、誰彼分け隔てることなく接するレムリアの態度に、溜息を付きながらレアランは憧れるのだった。

「これから大広間にいらっしゃるのですたら、ご一緒しても構いませんでしょうか？」

「ええ、もちろんです。一緒に参りましょう、レムリア姫さま。」

一方、レムリアの挨拶を聞いて暫し啞然としていたグランは、はっと我に返ると声の主に挨拶を返した。

「今度は大公爵殿下か、何度聞いても他人事にしか聞こえやしねえぜ」

決して声には出さなかったが、グランには苦笑を堪えるにもそろそろ慣れる時期ではあった。

“・・・まあ、これなら大戦士様の方が100倍よい響きだ。大悪魔も有るんだから大戦士もありか・・・”

さり気なくレムリアの手を取って、つと先導するレアラン。こうして一行が歩き出してからすぐに、先頭の二人の騎士がピタリと止まった。通路前方の壁に、長身の男性が壁に寄りかかっていた。全身に黒の色を纏い、口元にはシニカルな笑みが浮かんでいる。

「よつ。」

ずっと片手を上げて挨拶したその声は、何とも軽薄そうで軽かった。思わず、護衛の騎士が拍子抜けしてずっとこける。

「大公女さん、大公爵さん、そして夢見姫さんか。とりあえずは、

“おはようさん” ってとこかな」

「おはようございます、ディンシルさま」

「おはようございます、黒の剣聖さま」

グランの肩を気軽にポンポンと叩くと、レアランとレムリアの挨拶に軽く手を振る。

「これから朝食だろ？ 一緒に行ってもいいかな？」

「どうぞ。ご一緒致しましょう」

言いながらも、その外見と態度のギャップに、思わず笑みを漏らすレアランであった。

“・・・ランバルト・・・”

少しの間だが、グランはデインジルから剣の師として交えた男のイメージにだぶる物を感じていた。調子が狂うのも事実だが、旅の他の面子はどうも難しい面が多いので、こう言った自分に正直な相手は、グランにとって歓迎すべき対象だった。

「ヒラリーと一緒にではないのか？」

肩を叩かれながら、あのハンスーが浮かべる様な笑顔で返した。

「お嬢さんは早起きだね。とつくに朝食の間についてるだろうさ」

デインジルは俗っぽく、肩を竦めて言った。数多の尊敬を人々から集めている守護者の威厳もかくや、と言ったところである。

だが、そんな態度もやんわりと突っ込みが入るまでだった。

「そのとても礼儀正しい言動は、紫の騎士さまから大いに評価されることでしょうね。」

「え、あ、おっ？」

うふふふ、と口元に手を当てて笑うレムリア。釣られて、レアランもにつこりしている。いや、げに恐ろしきは強固なる女性連合軍か・・・。

「姫君。何を持ってすれば、その様な悲惨な事態から私を救い出して頂けるのでしょうか？」

「もちろん冗談ですわ、ディンジルさま。エルスでも五指に入る剣の使い手、『黒の剣聖』たるあなたさまが、斯様な事ぐらいで動揺される訳がございませんこと？」

「ぐっ……」

“何か、レムリア姫の気に障るようなことをしたのかなあ”

何とも理由が分からないディンジルは、大分情けない表情をしていたのだろう。レアランがクスクス笑いながら合いの手を入れた。

「先を急ぎましょう。紫の騎士様をお待たせする訳には行きませんか」

「ええ、そうね。うふふ、それはそれで……」

最後は小声となったので、周囲の人には聞こえなかったが、ディンジルにはしっかり聞こえたようだった。最大限に威厳を。そんなものが残っているのならばだが。取り繕うと、不自然に明るい口調で言う。

「ははは、所謂“空腹を覚えた”って状態が続くと、急な状況に対応できないだろうから、早く朝食を食べに参ろうぞ、皆の衆！」

いや、はちゃめちゃである。

グランはと言うと、眼前で繰り広げられる内容に、半ば呆れ、半ば恐怖しながら事の推移を黙って見守っていた。

“女って生き物には一生修行しても勝てねえだろうな……ましてや、複数揃ったら勝機は見いだせまいよ”

茶番が落ち着いたころ、そう結論つけることにした。そして、一方的に攻められていた御仁の肩を黙って叩くと行列の人となった。

大広間に到着すると、衛兵がドアを大きく開け放つ。

「おはよう!」

一行は、部屋の中の人影に挨拶をした。

封印の門 - 06 「叡智の夢見姫」 (後書き)

「魔性の瞳」のヒロイン、レムリア登場です。魔性から六年が過ぎ、彼女の精神も態度も安定してきました。エリアドとの仲は・・・それはまた別の物語にて(笑)。

もう一人、デインジルはヒラリーと同じく『守護者』(Ward en)で、“黒の剣聖”と呼ばれています。デインジルも長らく闇に捕らわれており、何度も冒険者達やヒラリーと剣を交えています。最終的に、“忘却の街”イスで解放され、また光の陣営に戻ってきましたが、(ヒラリー曰く)その際に性格が大きく変わってしまった様です。いやはや・・・。

封印の門・07 「運命の集い」

ジヨフ大公国／宮殿／大広間

「おはよう！」

ヒラリーが入り口に視線を振ると、グランを先頭に主だった面々が広間に入ってくるところだった。窓際を離れると、挨拶のために片手を上げる。

「おはよう、レアラン大公女。良い朝だな、グラン」

気さくに挨拶をするグランと、その横に付き従うジヨフのレアランに挨拶を送る。二人とも、これまでの重荷が取れたのか、どこか和らいだ表情を浮かべている。

良い表情だな。

自然に、こちらにも笑みが浮かんでくるような、自然な笑みだった。その後ろに目を向けると、深い、吸い込まれるような漆黒の視線が見返してくる。

「紫の騎士さま。おはようございます」

「レムリア姫　おはよう」

マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ　“灰の予言者”
の娘である真理査、コーランド女王ラーライン、冒険者キース・ウインザーの妹シザリオン・ウインザーと共に、現存する“夢見”の一人。光と闇を、自身に秘めた不思議な女性。

“魔剣士” エリアドのパートナーである、と言っただけでも類稀なることだが。

丁寧に朝の挨拶をする可憐な娘の向こう側に、不意に非常に不愉快に感じる軽薄で薄っぺらいヘラヘラ顔が目に入った。自分でも、表情が険しくなるのが判る。

「おっはよう、マイ・ダーリ・・・」
『めぎっ！！』

皆まで言わせず、“フォウチューン”の小尻を、そのにやけ面にめり込ませる。無論、鞘に入っただけだが、それでも十二分にダメージが伝わる。

何事もなかったかのように、踵を返す動作のまま、更に“フォウチューン”で後方にとどめの一撃を見舞う。これが、性懲りもなく最初の打撃から瞬間復活してきた強者の鳩尾に綺麗に決まる。

「一騎撃沈、ですね」

レムリアの結果判定を待つまでもなく、地面に崩れ落ちて黒い小山となるデインジル。

「莫迦者が。」

冷徹な口調で言うと、何事もなかったかのように、皆が座る大テーブルの席に着く。だが。

「ははは、死ぬかと思ったよ。」
「・・・」

笑顔で、隣に腰掛けていたのは黒の剣聖。当代きつての剣の使い手にして、エルスを守護するWARDENの一人。しかし、先の“アルカナの舞”に加わる過程でどこか人格が破壊されたと密やかに噂されているナイスガイだ。

「タフだな。」

「それだけ取り柄なんだよ、ハニー」

「・・・どうしても、今日を新しい記念日としたいのか？」

「キミという限り、毎日が記念日だよ、ハニー」

「・・・」

こやつと話していると、わたしまで良からぬ影響を受けてしまふ・・・

深い溜息と共に、こめかみに指先を当てる。この不幸な状況に抗議するかのように、頭がズキズキと脈打っていた。

「お待ちせしております。まだジャンニさまがお見えになっておりますが、折角のお料理が冷めてしまいますので、先に始めていきましょう。」

レアランの朗らかな声が、この膠着した状況から引っぱりだしてくれた。感謝の眼差しを大公女に向けると、ヒラリーは気を取り直して給仕が注いだ紅茶のカップを手を取った。

周囲を見回すと、グラン、レアランが上座に座り、レアランから時計回りにレムリア、エリアド、空席、大莫迦者（注：ディンジル）そして自分、そして再び上座のグラン、と座っている。

ジャンニは、確か朝は早いはずだが・・・何をしているの
だらうか？ ふむ・・・。

思案顔で、紅茶のカップを傾けるヒラリーだった。

封印の門 - 07 「運命の集い」（後書き）

読み難かった部分をの修正を行いました。登場人物が減っていますが、後の話には影響がありませんので、平にご容赦を。

封印の門 - 08 「時を跳ぶ妖精」

ジヨフ大公国 / 宮殿 / 客室 大広間

私の名はジャンニ。ご覧の通り、妖精族（High Elf）の魔法剣士だ。とある事件で、私はこの時代に跳ばされてきた。それ以来、何とか元の時代へ帰ろうとしているのだが まだ良い方法が見つかっていない。

途中知り合った仲間と共に、私はイースタン南西部にある小国、ジヨフの再興に助力することになった。とこしえ永久の闇より、捕らわれていたレアラン姫を救いだし、大公女の位に就けると共に、このミッシオンは成功裏に終わった。その後、どういう訳だか自分でも判然としないが まだジヨフ大公国に滞在している。ここにいると、クリスと暮らしていたあの森の館が思い出させるからだろうか・・・

私は、長距離でも移動が苦にならない。なぜなら、私には空間の足と風の翼があるからだ。しかし、今は早足で大広間へと急いでいる。

豊饒祭の間は何やかやと忙しく、早目に空蝉を創シミュラクラムっておいて本当に良かった。研究所建設のためには私があと何人か必要かもしれないが、お国柄を考慮して1人にしておいた。1人でも私は私、私とのリンクもあつて設営は万端にこなされている。しかしそれでも、公は式典、私は“光の樹”の世話など、呪文のリサーチ並にバタバタとしてしまった。もっとも世話などといっても、どのように世話をしたらいいのかさえも解らず、見守ること以外にやることはなか

った。

そうしていると、時は『アッ』と言う間に過ぎてしまう。写生も思ったより多く描いてしまった。その慮外の時間が、こうして私を急がせている。油断は、私が空間の足と風の翼を持っていたからなのだ。

こういった場合の徒歩は、実は余り好きではない。が、「郷に入っては郷に従う」のは当たり前で、個人が少々疲れることなどより、遥かに大事なことなのだ。

“ 宮殿に跳んでいったら、大目玉だからね ”

微笑みかけると、肩に止まったマニトウが透明ながらもうなずいた。さて、扉の向こうには大広間が広がっている。一息吐いて、一足踏み込み、

「 皆様様方、おはようございます！ 」

礼の後に席と部屋を見渡し、

「・・・どうやら八点鐘には間に合ったようですね・・・、失礼致しました。」

私の為に用意された、グランとヒラリーに挟まれた席に、速やかに着いた。

封印の門 - 09 「嵐の前の静けさ」

ジヨフ大公国／宮殿／大広間

グランは部屋に入りながら改めて幾人には挨拶を繰り返した。そして自分の席に腰を下ろすと周りの面々を暫し観察する。と、言うよりそうせざるを得なかった節もある。

特にヒラリーらのやり取りを見てみると、なんともコメントのしようも無かったが、あれはあれで似合いのカップルなのだろうと考えることにした。まあ、自分にとってはレアランで良かったと、つくづく思っではいたが・・・。

レアランとは、此処まで些か遠回りをしてきたせいもあるが、自分が駆け出しの戦士だった頃からの想いがあり、筆舌しがたい選択を強いられた事もあった。それを思うと、今がなんとも平和な一時だと心から思うのであった。

“しかし、良くもこれほどの連中が力を貸してくれたものだ”

柄にもなく感謝の念が浮かぶ。あとは此処には居ない盾の騎士連盟（Shieldland）の『將軍様』の事も脳裏をよぎる。

“あいつもそうだったように、いま此処にいる連中も時を経ずして各々の旅に出て行ってしまふのであらう・・・”

自分自身、戦士と言う看板を掲げてからは、一箇所に定住することを望まず、また考えもせず流浪を重ねてきた。それが目的達成の為であったとして、現在の現実を頂点と考えハッピーエンドの幕切れを意味することなのか。自由に旅立てる友人を、羨ましく思うの

が罰当たりだと思いつつも、そう見てしまう事は否定できなかった。

ジャンニが入室して席に着いたのを見ると、レアランはそつと立ち上がると、朝餉の席に着く客人全員に笑みを向ける。

「皆さま、おはようございます。今日も、素晴らしい一日となりそうですね。ごゆつくり、朝食を召し上がって下さいませ。」

「お気遣い無く、レアラン大公女殿下」

そつなく返すのは黒の剣聖。どこで鍛えたのかは知らぬが、こういった社交辞令にはめっぽう強い。その隣で、素知らぬ顔をしてヒラリーが優雅に紅茶のカップを傾けている。

「我々一同、斯様に心安らぐ席を設けて頂き、そのお心遣いに感謝の念に耐えま・・・」

ボグツという鈍い音と共に、その如何にも見え透いた軽薄な言葉の羅列が唐突に途絶える。机に突っ伏した黒の剣聖にちらりと視線を振ると、紫の騎士は冷たく言い放つ。

「長広舌を振るうな。」

「誰がだい、ハニー？」

「貴様のことだ。クリティカルヒットチャートで即死が出ているのに、ケロリとした顔で甦ってくるような、一人外魔境のことを言っている。」

「ははは、誉めるなよ」

「その所行に、“自意識過剰”と言つのも加わったか」

「うふふふ、もてる男は辛いね」

ヒラリーの皮肉も、全く効き目の無いディンジルであった。

一方、“夢見姫”とは別々に大広間にやってきた“魔剣士”は、静かに彼女の隣に腰掛けた。

「おはよう、レムリア」

「おはようございます」

横目で“命懸け”とも思えるヒラリーとディンジルのやり取りを見やるエリアドの表情には、呆れた様な笑みが浮かんでいる。

「・・・彼もタフだね」

「喜んでおやりになっているようにも思えますけれども・・・」

存外、レムリアの言う通りなのかも知れない。

“・・・もつとも、本当にヒラリーの突っ込みを受けているのであれば、という条件つきだが・・・。”

「・・・それにしても、久しぶりのグレイホーク 銀龍亭でのグランたちとの再会 から始まった旅も、もう半年近くにもなるのか・・・。その間、いろいろなことがあった・・・な」

そんなことを思いながら、エリアドはレムリアに微笑みかけた。

封印の門 - 10 「迷いと決意と」

ジヨフ大公国／宮殿／大広間

「^{のどか}長閑な朝だねえ」

「・・・」

「備え有れば憂い無しと言うけどねえ　　本当にそうなのかなあ？」

「・・・何が言いたい？」

「この長閑な平和が薄氷の上にあるってことさ。考えてもみなよ。ついこの間まで、僕は敵だった。君も大きな負担を抱えて行動の自由がなかったし、何よりあの“彼方への門”が大きく開いたままだった」

「“門”は封じたぞ？」

「一時的にはね。だが、君の“フォウチューン”とエリアドの“震電”の封印も長くは持たなかった。ランバルトの聖剣の方がそりゃ強力だろうけど、あくまで永続的に続く封印を課せる迄の繋ぎと思うべきなのだろうね」

「・・・確かに、貴様の言うことも一理ある」

眉根を寄せながらも、ヒラリーは頷いた。

「そもそも、神器に等しいレベルの“彼方への門”を、ランバルトの聖剣で封じるだけで全ての事が終わったとは到底思えないのからさ。あの“門”自体をどうするか、と言う点も考慮しなければね」

そう宣^{のたま}うディンジルに、ヒラリーは鋭い視線を向ける。

「ジヨフのみならず、イースタンにも影響を及ぼそうとする“門”だぞ。封印するのが必然ではないか！」

「そうかな」

ディンジルの表情からは、先程の軽薄な笑みが消え失せていた。

「“来られる”と言うことは”行かれる”と言うことでもある。こちらから相手の勢力圏に行く手段を我々が持たない今、あの“門”の重要性は説明するまでも無い。このまま座して待つだけでは足りない。レムリア姫の剣ではないが、何時も“後からの先”を期待しては駄目なのだ」

「ふむ」

そうか、とヒラリーが頷くのと、レムリアが独りごちるのが同時だった。

「・・・確かに、それは自明の利ですわね・・・あ、お話を遮ってしまつて申し訳ありません」

「いいよ。これは全員の問題だからね」

気にしない、気にしないとディンジルは笑った。

レムリアのみならず、いつの間にか全員が朝食を食べる手を止めて二人の話を聞いていた。

「・・・だが、戦力的に十分ではない我らにとって、“行かれる”手段は宝の道具さではないのか？」

「今のままでは、確かにヒラリーの言う通りだな」

「ならばっ!!」

「“今のまま”ではな。だから、こちらから乗り込めるだけの戦力を集める必要がある。その為の、君と僕だろう？」

難しい表情を浮かべて聞いていたヒラリーだが、理路整然とした

デインジルの話は十分に理解できる点があった。

「それこそが、我ら“守護者”(Warden)の使命というところか」

「その通りさ」

「では、ここに不在の“紅の勇者”、“蒼の賢者”、“碧の魔導師”を呼び寄せるのか？」

「出来ればそうしたいがね。彼ら三人を呼び出せば、滅多な相手では歯が立たないからな。だが、ランバルトとダリエンを呼ぶには難しい召喚条件を整える必要がある。マクシミリアンにはさほど難しくはないが、彼奴は何処にいるかが判然としない。ましてや、白の聖者と灰の予言者は到底無理だろうしな」

「そう言うからには、何か腹案があるのだろうか？」

「まあね」

デインジルはグランに頷いた。

「だが、それを成すには仕掛けと時間が必要だ。その手立てが整う前に、このジョフが陥落しては元も子もない。この点、応急処置になるが打てる手は打っておく必要があるだろう」

「・・・」

腕組みをして考えるグラン。デインジルは悪戯っぽい表情を浮かべてヒラリに笑みを向ける。

「お嬢さんにはお気に召さないかも知れないがね」

「その様な俗っぽい名称で呼ぶなど言っているだろう」

「お嬢さんっていうのが嫌かい？ それじゃ、お姫さまっているのはどうかな？」

「尚悪いっ！」

何時しか本筋から逸れてしまつて、何時しか二人の痴話喧嘩に変わつていた。

だが、ディンジルが投じた一石は、十分効果を發揮していた。朝食を食べる手を止めて、レアラン、グラン、レムリア、エリアド、ジャンニは自分たちの置かれた状況を話し合つた。

「公都と公民を守ることを第一に考える必要があるが、その為の戦力が不十分だ。カイファートと話して、至急手を打つ必要がある。」

右手を左手に打ち付けながら、グランは言つた。

「公都の民から募りましょう。野外の戦いには向きませんが、公都の城壁を頼りとすれば、手助けには成りましょう」

「そうだな。姫から公民に語りかけて貰えれば、必ず共に戦おうと言う者が出てくるだろう。防御だけではジリ貧だ。少しでも野外の機動戦力を増やして、こちらが行動の自由を持つことが重要になる」

「僭越ながら、わたくしも大公女様、大戦士様のご意見に賛成です。ここに集つたのも何かの縁でしょう。わたくし達も、出来ることを致しましょう」

そうですね、とレムリアはエリアドに視線を振る。

「ふむ。異論はないな」

魔剣士は短く肯定の意志を示した。

「そうと決まれば、まずはカイファートのところか！」

「朝食が済み次第、伺いましょう」

「ならば、礼を失さない範囲で、手早く朝食を頂くことに致します」

か」

「偶には良いこと言うじゃないか、エリアド」

そんなグランの突っ込みに、エリアドは口元に皮肉っぽい笑みを浮かべるだけだった。

「よし。それでは、皆も食事は済んだみたいだな。カイファートの所へ行こう」

勢い良く言うと、グランが立ち上がった。

「グラン。私とディンジルは先に済ませねばならないことがある。後で合流しよう」

野暮用でね〜と素敵な笑顔で言うディンジルの脇腹に、フォウチユーンの？をさり気なく突っ込む。堪らず、悶絶して崩れ落ちる黒の剣聖様。当たり前になりつつある光景を綺麗にスルーして、グランはヒラリーに大きく頷いた。

「了解した！」

「我々は同行しよう」

エリアドとジャンニは、互いに一つ頷くと立ち上がった。

全てがてきぱきと進む中、僅かに憂いを表情に浮かべるレアランに、レムリアがそつと声を掛けた。

「如何されましたか？」

「いえ・・・」

思う所があつたレムリアは、先に朝食の間を出て行くグラン達と少し距離を取ると、囁き声で言った。

「大公女殿下。何を不安なお顔をされているのですか」

「レムリア姫さま・・・」

「今、皆様は大公女殿下の事を見えています。そして、あなたの中に自分たちの勇気を見い出そうとしています。今はまだ、ジョフの国民にとって未曾有の危機的状態です。ご心労は重々理解していますが、ここは気をしっかり持って頂き、国民の先頭に立たねばなりません」

レアランは、はつとした表情を浮かべた。見つめ返してくる不思議な黒い双眸には、真摯に自分とジョフを心配する想いが込められていた。

「ご無礼を承知で、僭越なことを申し上げてしまいました」

丁寧に一礼して、レムリアは締めくくった。

「いいえ。申し上げて頂いて、心から感謝いたしますジョフの大公女として、国民に不安を見せるようなことがあつてはなりません。けれども、わたくしはまだ大変未熟で・・・しばしば感情を表に出してしまいます・・・」

もつともつと頑張らなければ 隣に座って自分を護ってくれている愛しい人の手を煩わせないように。レアランは決意も新たに、自分の想いを言葉にした。

「それでも・・・この国に住む人々が幸福になるために、不安なく

毎日を暮らして行ける為に、わたくしはどのようなことも喜んでやりたい　　そう思うのです。」

「貴女は十分に頑張っていますよ。」

思いもしなかった声に、俯いていたレアランは顔を上げた。先に行ったと思っていたグラン、エリアド、ジャンニの三人が立ち止まっていた。

「聞こえてしまったのは申し訳ない。だが、一言言わせて欲しい」

グランは、柔らかい口調でレアランの言葉に続けた。

「いま、この国そして国民に一番大切なのは貴女が存在其の物なんだ。それ以外のことに気を使うのは俺でかまわないし、それくらいの仕事は残しておいて貰わないと困る。」

「はい・・・」

僅かに、レアランの瞳は潤んでいた。長く虐げられていた祖国ジヨフ。その再興を担う我が身ながら、レアランは不安と心細さで心が潰れそうな思いだった。

だが、彼女の傍らには、この偉丈夫の大戦士がいる。そして、大戦士を友と呼ぶその仲間達もいる。小娘に過ぎない自分に、斯様な人々が手を貸してくれる。それが、レアランをして、自分も心を強く持たなければいけない、と思うのだった。

しかし、その表情にまだ危うげさが消えていないことを、隣に立って聞いていたレムリアには強く感じられるのだった。

封印の門 - 10 「迷いと決意と」 (後書き)

旧編に対して、内容を大幅に改編しました。話の辻褄を合わせる為に、宰相カイファートと出会う所まで、大幅改編が続きます。

封印の門 - 11 「行動の時は今」

ジヨフ大公国／宮殿／大広間

「それでは、僕らはちよいと野暮用があるので失礼するよ。ヒラリ
ー、行こう」

「野暮用ではなくて準備だろう」

デインジルの軽口に、生真面目にヒラリーが応じる。

「時間が掛かりそうか？」

「いや、今はそれ程でも無い。追っつけ、僕らも宰相閣下の所に顔
を出すよ」

「顔を出すでは無く、『お伺いする』だろう」

この莫迦者め、とヒラリーが結ぶのも常用句だ。

「判った。俺達の方は、先にカイファートの所に行ってるぞ」

「了解。ほんじゃ、後ほど」

もつと礼を失さない言い方が出来ないのか、とヒラリーがデイン
ジルに小言を言いながら二人で出て行くと、グランは残った一同を
見回した。

「さて。我々も一度自室に帰って用意を調べてからカイファートの
所に行くか？」

「こちらは・・・」

ちらりとレムリアの様子を確認してから、エリアドは言葉を続け

た。

「・・・問題ない。」

「私もそれで大丈夫です」

ジャンニも首肯する。

「細かいところは姫にお願いする事にしよう。それでは各支度おのおのを済ませてカイファートの所に向かうことにしよう。姫、それで宜しいでしょうか？」

グランはレアランに向き直って言った。その表情には、僅かな“揺らぎ”が垣間見えていたが、それに気がついているのは同性のレムリアだけだった。

「はい。その様に、お願いします」

「よし。では、半刻後にまたここに集合しよう」

「判った。レムリア、行こうか」

「はい。皆さま、失礼いたします」

エリアドがレムリアと連れだって部屋を出た。

「大公女様、グラン殿、美味しい朝餉、ご馳走様でした。では私も早速。次も一番最後ですと、“似非妖精は蚊帳の外”になりかねませんからね！ それでは！」

ニコリと微笑んで少しおどけながら言うと、トレードマークの羽根付き鰐つばひる広帽子を手業でクルリと回し被りながら“水晶の霧”（Crystal Mist Mountains）の峰々を一瞥し、ファミリアのマニを伴って大広間を後にした。

一人、自室に向かう廊下を歩くジャンニの脳裏に、ふっと先程隣席を立った彼女のことがよぎった。

「・・・ヒラリー・・・」

何処か、この世の者ではないような儚さを秘めた麗人。そして、時空を跨ぐ聖剣“フォウチューン”を担う守護者（Warden）“紫の騎士”。

思えば初めて出会った時、彼女は華奢な身体に、傍目にも不釣り合いな大剣を両の手に身体を支える杖の様に抱きながら、歯を食いしばっていた。自身を孤独に追いやって、言うなれば危なげな感を呈しながら。

だが・・・現在は黒の守護者というパートナーを見出して以来、多少は心の安寧を得た様だ。

・・・よかった。心からそう思う。

しかし、彼女は現在も此の世の守護者であるし、その両肩に押し掛かる重責は、私が推し量るに及びもつかぬだろう。

先程黒の剣聖が申し立てた“過去の事例”、そして彼女が言っていた“ここに集っている者には自明のこと”とは何の事だろう？

そして何故・・・

退室する際に彼女が見せた、頑なな蒼い瑠璃鋼の様な瞳の焰めき

は、私にそんな事を想わせた・・・。

残ったグランに、レアランは微笑んで言った。

「わたくしたちも支度をいたしましょうか」

「了解です、姫。差し支えなければ、後でお迎えに上がります。では、後ほど」

「はい、大戦士さま。また、後ほど」

大股に大広間を立ち去るグランの背を見送った後、一つため息をつくとレアランも大広間を後にした。

封印の門 - 12 「想いを通じて」

ジョフ大公国／宮殿／回廊 宰相の執務室

カイファアー・ジーニアス・ケルヴィン。先代ジョフ大公トールンスの盟友ながら、思想の違いから袂を別たもとつてしまう。『政治を全うするには、手段を選んではならない』 潔癖なトールンスはカイファートのそんな想いを理解することが出来なかった。国が、善政故に傾いていくことに失望した結果、カイファートはその心の隙を“闇の大君”に利用され、ジョフが十年もの間、魑魅魍魎の跋扈する失地となる原因を作ってしまう。

コモン歴590年 その原因である“彼方への門”を、グランを始めとする冒険者の一団が見事に封印。悪鬼の巣窟と化していた公都ゴルナを制圧し、ジョフの領内から魑魅魍魎を全て駆逐した。踊らされたとは言え、闇の勢力をジョフに引き込んだカイファートは、ジョフ解放の際にその身を持って償おうとする。だが、トールンスの遺児であるレアラン姫にその罪を許され、残りの生を大公女とジョフ復興に捧げることを誓った。

カイファートは希代の政治家であり、現在ジョフの宰相の地位に付き、内政外政を問わず、陰に日向に若き大公女を補佐すべく、全身全霊を挙げて使えていた。

一度自室に戻ったレアランは、手早く身支度を調べると、再び自室を出た。

カイファートの執務室は、大広間と同じ階だが、建物の別翼にあ

る。

ちなみに、代々ジョフ大公が住まうこの宮殿だが、奇跡的に先の失地戦役を生き延び、こうしてまた住まうことが出来るようになっている。そして、この宮殿はいまだ復興途上にあるジョフ大公国民にとって国の象徴であり、大公家の心の拠り所でもあった。

人々に安寧と豊かな暮らしを与えることが、大公家としての義務である。

生前、常々父である先代の大公トールランスが述べていた言葉である。その言葉を、娘であるレアランは忘れる事がない。

“わたくしは、国と民と共にあって、はじめてわたくし自身であると言えるのですね”

一途にレアランは想う。そして、その想いを支えてくれるグランと、その仲間達に心からの感謝を捧げていた。

「あ・・・」

長い廊下を歩ききり、角を曲がると、正面の扉の前に巨躯の異丈夫が立っていた。その人物を見たレアランの表情には嬉しそうな笑み浮かぶ。

「グラン・・・」

人気のない回廊に立っていると、軽い靴音が響いてきた。

「姫」

グランには、ここで姫を待っていたと思われるのも、気恥ずかしいと思う気持ちがこみ上げてくる。

「どうも部屋を覚えるのは苦手だね・・・戦場では疾風を誇った俺も此処では形無しだ」

どこまで本当か判らない下手な冗談でごまかしつつ、グランは姫が歩いてくるのを待った。

グランの呼びかけに軽く頷くと、レアランは相手にゆっくりと歩み寄った。

自分より、有に頭一つは上背がある異丈夫を見上げてみる。精悍な顔つき、広い肩幅、どっしりとした雰囲気。

“この人の傍らにいと、不思議と安心感を覚えます・・・”

最強の戦士、アルフレッド・グランツェフ。不器用だが、実直で優しい漢。何度出会っても、何処で出会っても、自分はこの戦士に心惹かれるだろう。そう思うと、レアランは自然に浮かんだ笑みを相手に向けた。

「お待たせしてしまつてご免なさい」

レアランの自分に対する笑顔が眩く感じ、グランは内心赤面する思いだった。

“俺はこの笑顔に弱い、俺を殺るには刃物は要らん”

些か女性に対する免疫不全でも有るのだろうか　妙なところでうろたえる自分に、理解不能になる部分があった。

“ いやいや、特別だよ。この女性にだけはな”

そう考えていると、新たな靴音　それも複数　が聞こえてきた。程なく、レムリアを伴ったエリアドが姿を見せた。レアランが二人に会釈をする。

「先に、お部屋に入って残りの方々をお待ちした方が宜しいかと思えますの」

如何でしょう、レアランはグランとエリアドに尋ねた。本来は、ジヨフ大公国の最高権威者なのだから、『中に入って待つ』と言っ
てしまえば良いのだが、最初に相手の意向を尋ねるところが、如何にもレアランらしかった。

「そうだな。で、どうするか？」

グランは出掛かった言葉を飲み込むと、エリアドの意向を確認することにした。

「・・・はて。ここはどなたの治める国で、この城の主はどなたでした？」

グランとレアラン姫の問いかけるような視線に、エリアドは少しばかり皮肉っぽい微笑みを浮かべてそう応じた。

「私にそこまで気を遣う必要はありません。気を遣っていたけるのはありがたいことだと思っていますけれどね。けれど、あまり気を遣われてしまうと、こちらとしても、かえってやりにくい。昔のように友人だと思ってくれるのなら、あまり気を遣わないでください」

嫌みにならないように気をつけながらも、エリアドはそうに続けて言った。

「相変わらず可愛げねえな・・・」

やれやれ、と頭を掻きながらグランは苦笑した。

“ 大体、他人の部屋の前で何を悩まなければならん・・・ ”

その部屋には、現在のグランが一番重用し且つ信頼している人物がいるはずである。国内の政策面のみならず軍事面まで指導力を発揮し、阿呆なグランに取って真に得がたい人物であった。また自分の名を冠した親衛騎士団の創設も進められている。

「姫？」

「はい。」

ジョフ大公国第一主権者の表情には、慈愛に満ちた笑みが浮かんでいた。その瞳には、自分を護る戦士とその友人たちに対する深い信頼が宿っている。

「じきに、ジャンニさま、紫の騎士さまと黒の剣聖さまもいらつしやることでしょう。わたくしたちは、失礼して先に中でお待ちしましょう」

レアランは扉の前に立つと、二、三度ノックして名を名乗った。

「カイファートさま、レアランです。大戦士さまとお客さまをご案内して参りました」

お入りなさい、と言言葉に続いてグランが扉を開ける。小声で礼を言うと、レアランはカイファートの部屋に入った。

封印の門 - 12 「想いを通じて」 (後書き)

漸く、一番厄介で混沌とした部分を抜けました。これ以降は、もう少し改編作業が楽になろうかと思えます。今後とも、宜しく願います。

封印の門 - 13 「希代の大宰相」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「これは、錚々たる顔ぶれですな」

重々しい声とともに、鋼の様な薄蒼の瞳が部屋に入ってきた者達に注がれた。

宰相カイファート。戦略と政略に通じた、ジヨフ大公国の至宝である。僅かな年月で、ジヨフを立て直しつつあるその見事な手腕は、近隣諸国にも鳴り響いていた。

「レアラン大公女殿下」

国民が敬愛して止まない“ジヨフの心”に対しては、カイファートは親愛の情を込めて優しく笑いかけた。二回りも歳が違ふこの若き大公女に対して、カイファートは父娘にも似た感情を抱いており、国の逆賊であつた自分の過去に捕らわれず、心優しく自分を受け入れてくれたこの娘を力の限り支えていこう。生まれ変わってジヨフ復興の一助を担ふことになつたカイファートは、心に固く決意していたのだ。

「大戦士殿」

次いで、戦いの中でお互いを認め在ったグランには、親しみを込めて挨拶をする。

「ムーンシャドウ卿」

グランの友人であるエリアドには、相応の礼を込めて一礼する。

「ジャン二殿と守護者のお二人はまだのようですね。一緒に聞いて貰う必要がありますので、今暫くお待ち申し上げよう」

その間、お座りになってくだされ　そう言って執務机の前に用意された椅子を指し示した。

グランは、“大戦士殿”のくだりに違和感を感じながら、相手に悪意があるわけでは無し、釈然としないのは自分本人の問題と思いつつながら勧められた席に着いた。本題は主役級全員が揃ってからという事で些細な報告でも先に聞いておこうと思った。

「本題の前に幾つかの報告を頼む」

どちらの内容を先にするか暫し考えると。

「アランの消息についてと、軍備の件だ」

手短に質問したが、聞くほうと答えるほうではやや質と量で不親切とも言える内容だった。アランとは昔のグランの従卒で、本人に言わせると、『アランの要らぬ御節介で、えらい事になった』と。しかしレアラン姫の前では決して言わない言葉でもあったが。その元部下はジョフ陥落と前後して行方知れずとなっていた。

また「軍備」とは復興を遂げる以上は最低限の治安維持が必要で、それは自国のものが望ましい。しかし軍備とは生産に何ら関与する

ものではなく、金食い虫であることも事実、無理な増強は禁物である事は重々承知していた。それだからこそ、「喜んで」この難題を宰相に任せた面もある。

グランが欲する軍備とは、他国侵略のものではなく、侵略を食い止める常備軍でありこの国の地理と照らし合わせて相手は人間に限らず、そのようなものから国と人民を守る戦力が欲しかった。そしてその中核は選りすぐられた騎兵で構成された機動戦力で、戦いの重大局面に投入できる直属部隊《LAG》であった。その部隊は特に軍規が厳しく、黒い装備で統一され遠方からでも敢えて識別できるようにしていた。

政治や経済に無知な分、この方面に張り切ってしまうのも致し方ないと本人も思っていることであつたが・・・。

「宜しいでしょう。では、まず軍備の件から説明をしましょう」

グランの言葉に頷くと、カイファートは徐に説明を始めた。おもむろ

ジョフ大公国の戦力は国が陥落した際にほぼ瓦解し、僅かな残存戦力がコランダ王朝グランマルク騎士団領に落ち延びていた。カイファートは、グランの指示を念頭に、この残存部隊を中核として三軍（中央軍、遊撃軍、飛翔軍）の編成に着手していた。

「最も重要なのは、辺境の警戒に当たる遊撃軍です。軽騎兵主体のこの部隊の整備が一番進んでおります。現在四個連隊が設立され、定数にはまだ程遠いのですが、それぞれ300・400騎の戦力を有しております」

カイファートの説明だと、北部、西部、南部にそれぞれ一個連隊

を投入済みで、四個目の連隊は首都ゴルナ近郊で訓練中、と言った。
とだった。

「次に、中核戦力となる中央軍ですが 兵員と装備の面で戦力充
実が難航しております。定数100を考えている親衛騎士団（LAG）
は僅か17騎。正面戦力の装甲騎兵部隊が120騎。装甲歩兵
部隊も350名に留まっております」

戦乱の中で、ジョフの人口の半分以上が失われていた。戦力を増
やそうにも、絶対人口が余りに少な過ぎるのだった。

「既に、移民の受け入れを奨励しております。また、我が国の軍に
志願する場合、幾つかの条件を満たせば、市民権を与えることも実
施済みです。それでも、人数は這うようにしか増えませんか」

軽く溜息を付くと。

「現在、コーランド王朝の好意で、重騎兵一個連隊、重歩兵一個連
隊、軽歩兵二個連隊を貸与して貰っております。実質的に、我が国
の首都を護っているのは、これらの外国の戦力です」

僅かに顔を顰めると、一つ咳払いをする。

「それでも、通常戦力は時間を掛ければ充足していくでしょう。し
かしながら、大戦士殿が要望された中核中の中核、親衛騎士団に推
挙する人材が圧倒的に不足しておりますぞ。我が国の精髓たるこの
戦力、他国人を入れる訳にも参りますまい。さすれば、と国内を見
回しても 既に親衛騎士となっている17騎以外に、今のところ
候補がおりません」

更に一つ、とカイファートは言葉を続けた。

「更に、新たな軍として飛翔部隊の創設を進めております。早期警戒の向上と、迅速に問題発生点に部隊を投入する為に、是非とも必要だと考えました。これは、主としてグリフォンかペガサスを駆る騎士による部隊となりますが、現在、3騎しかおりません」

そこまで話すと、カイファートは一瞬レアランに視線を振った。

「そして、その3名の騎士の中に、大公女殿下も含まれております」

封印の門 - 14 「緊迫する情勢」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

グランは真剣な眼差しで宰相の話に聞き入った。状況が厳しいのは至極当然で、グランも予想していた通りであった。宰相が話を一時の中断したところで幾つかの言葉を挟むことにした。

「卿以外にこれほどの事は出来まい。苦勞はかけるが引き続き頼む」

一呼吸おいた後、グランは厳しい表情で続けた。

「先ず、遊撃軍に対しては予備兵力が欲しい。贅沢なのは百も承知だがだが此処はやはり数が勝負だろう」

“・・・我ながら無理を言う・・・”

「次に中央軍、装備や物資に関しては微々たる物だが俺の私財も自由に使ってかまわない、運搬に関しては金さえ出せば我が親父殿が如何様にでもしてくれるはずだ」

グランにしては珍しく言葉を多用する。

「いま、中央軍に対し、特にLAGに対しては敢えて頭数を気にすることは避けたい。今ある人材は将来の幹部候補になるべく人材である。然るべき訓練の後、受け皿が出来てから部隊を充実させることも出来るだろう。まあ、人を増やし国を富ませ軍を強化する、言うのは簡単だ。それと敢えて言えば『親衛旗』とは言え何も地位や

名誉に拠るものでなく、広く一般部隊より能力に見合った者を登用したい。古くから地位や名誉が第一と思う人間には煙たいかもしれないが俺自身、平民出身のよそ者だしな」

此処で流石にグランも溜息をついてた。改めて気を取り直すと言葉が続けた。

「早期警戒の重要度は判る・・・がレアラン姫を含めるのは如何なものか・・・。当然、俺の、いや私の考えている心配なぞ卿に判らぬ筈も無いから言う必要も無いのであろうが・・・」

言葉を濁さざるを得ない自分が、グランは苦しかった。せめて自分が随行できるなら心配も少しは薄まったであろうが、姫を兵として扱うのは流石に強い抵抗を覚えた。

「俺もドラゴンにでも乗って空を翔られたらなあ・・・おっと、いまのは非公式な発言だ」

「あの・・・」

遠慮がちに口を開いたのはレアランだった。

「飛翔軍に加えて貰うことは、わたくしがカイファートさまにお願いしたので。わたくしも、護られるだけではなく、国民くにたみを護りたいのです・・・」

非力なわたくしですが、出来ることを精一杯やりたい、とレアランは言葉を結んだ。

「大戦士殿。確かに、大公女殿下から件のお話くだんしを伺ったとき、最初はどうかと思いました。大戦士殿が指摘されたように、“前

る”ことには危険が付き物ですからな」

今、もしもジョフの民の“心の支え”たるレアランに何かあったら 弱小国のジョフは、ひとたまりもなく瓦解してしまうことだろう。

「それでも、敢えて私は大公女殿下の飛翔軍への編入を認めました。大公女殿下の心配は、無論私も抱いております。だが、今のジョフには例外を設けている余裕がない。一瞬の対応の遅れが、この国を容易に崩壊させてしまいます。大戦士殿のご心配も判りますが私には早期警戒の飛翔軍を強化できる機会に目を瞑る訳には参りません」

そつとレアランが言葉を足す。

「わたくしの我が侑を、カイファートさまには聞いていただきました。くにたみ国民の安寧を護るのならば、わたくしは率先して我が身を捧げましょう」

真剣なレアランの言葉に、有るか無しかの笑みを浮かべると。

「無論、大公女殿下の安全には十分な配慮を致しますぞ。リスクは付き物と言えども 座して待つ訳ではありませんので」

「・・・」

グランには、何もかもが予想できる範疇であったが、途中で口を挟まず、最後まで沈黙を続けた。何度か意を決して言葉を選び発言をしようとしたが駄目であった。

「判った・・・だが絶対に無理はしないでくれよ・・・」

漸く口にした自分の言い様にグランは些か情けなさを感じたが、これ以外に言葉が出なかったのである。

“やれやれ、苦しい台所事情は判っていたが此処まで厳しいとはなあ。いつそ頭を下げてでも阿呆のハンスーに兵を借りるか…心の騎士団所属時の自分の配下の戦力をヴェルボボンクに行って借りられないだろうか……”

どちらにせよ政治的に面倒くさく思い、グランは言葉には出さなかった。

「やれやれ」

グランは大きく溜息をつくと、一言こぼしてしまった。

「まあ、悲観した話ばかりでもありますまい」

宰相カイファートは有るか無しかの苦笑いを浮かべた。グランが大公女に対してどう思っているか、大公女がグランをどう思っているか お互いの想いを思えばこそ、二人の行動だった。

「遊撃軍の増強は、第一優先で取りかかりましょう。幸い、コーランド王朝騎士団領とビセル侯国が乗馬の提供をしてくれるとのこと。さすれば、あと二個連隊の編成が可能でしょう」

机の上で腕を組むと、その上に顎を載せる。

「最後になりましたが 強力な助力の申し出が来ております。シエリドマール流域きつての手練れ、龍騎聖^{りゅうきせい}の三君が、しばし当地に

賓客として逗留してくれるとのことでした。その間に、都に異変が起きれば、火の粉を振り払う手伝いをしよう。有り難いことに、斯様に申されております」

龍騎士^{ドラグ} 水晶の霧の山脈中の、“龍泉峽”に住まう三人の龍騎士^{リシ}。それぞれが、剣、槍、弓の免許皆伝（Master）だ。滅多に人里と接触しないが、時折気まぐれにも街に短期間滞在することがあった。

「剣聖のサツコウ殿、槍聖のネースビー殿、そして弓聖シートル殿。何れも一騎当万の方々です。今の大陸で彼らと互角と言えるのは多くはおりません。守護者^{ワーデン}のお二人は無論の事、我らが誇る大戦士殿。グレイト・キングダム^{バクラニア}のユーリアス・v・ドラッヘン伯爵。ヴェロンディの“龍の盾”、漠羅爾新王朝傑都の“魔導卿”。そして……」

ちらりとその方向に視線を振ると、言葉を結んだ。

「……ここにおられる“魔剣士”、エリアド・ムーンシャドウ殿。この方々でしょう。」

封印の門 - 15 「剣豪並び立つ」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「龍騎聖か。頼もしい連中が馳せ参じてくれたものだ。早急に俺も挨拶を済ませたいので段取りを頼む。・・・しかし、」

グランは宰相の顔を眺めながら、些か意地の悪い表情を浮かべて続けた。

「世の中には、強い連中がまだまだいると言う事だな？」

笑ったつもりが苦笑いになってしまふ。

「御冗談を。貴公^{あなた}を含めて、私より強い人は、まだいくらもいますよ。」

苦笑いを浮かべるグランに、エリアドは微かに苦笑する。

“やれやれ。また彼は、自分のことは棚にあげてしまっているのだな。ジヨフに眠る“最強”の称号とその技を手にしたのは、さて、どこの誰でしたっけ、ねえ。・・・まあ、それにしても。”

「・・・“龍騎聖”・・・ね」

エリアドは小さく呟いた。彼の気持ちは、まだ会ったことのない3人の龍騎聖　とりわけ“剣の”と呼ばれるほどの使い手であるサツコウ　に向いていた。

「・・・」

エリアドの反論に、グランはしばらく自分の考えに没していた。

“まあ奴らしい論法だが、いまの俺に奴を超えることは出来ないだろう・・・俺の知っている限り、特に身近なところではパワーでは親父に勝てず、技ではエリアドに及ばず、テクニクでは魔法を絡めたラダノワ卿の戦闘に及ばず、そしてヒラリーにも及ぶまい・・・敢えて勝る面があるとすれば『悪運の強さ』だな！”

確かに、グランには先日身に付けた秘剣がある。だが、グランには『あれ』は借り物のような気がしてならなかった。また大砲をぶっ放すような感じもありギリギリまで使うことは無いと考えていたのである。

“それに、使うときは俺流にアレンジを考えておかないとなあ”

そう思うと、グランは気を取り直してにやりと笑った。

「今まで知らなかったとしても、今知ってしまえばいいことさ」

それは、如何にもグラン流の考え方ではあったが・・・。

「何故に、人は“強い”か　古来から、多々問われた命題でもありますな」

カイファートは、両目を細めると薄い笑みを浮かべた。

「単に腕力だけでは無い。ましてや、剣技や帯びているモノ故でも無い。真の強さは、別の所に在るうかと思えますぞ」

その言葉に、レアランが大きく頷いた。その表情には、嬉しそうな笑みが浮かんでいる。

「漢”たるもの、己の行くべき道こそを見失うことなけれ　私は、斯様に思っております」

「漢”たるもの・・・か」

グランは、己の能天気な発想を吹き飛ばした後に呟く。

「言うは易し、だな。特に俺のような奴の場合は如何にその能力を発揮するかが重要だと思うし、また誰のために使うかだ・・・少なくとも今の俺に迷いは無いよ」

笑顔で話をまとめると、グランは視線をレアランに向けた。

そのレアランは、黙して皆の話を聞いていた。元より剣技に暗いレアランには年若く経験不足もあって、グランが自分の何を不甲斐なく思っているかはつきりとは判らなかった。

“わたくしは、側にいて下さるだけで、とても心強いのですけれども・・・”

公国民もジョフ復興の原動力となった“大戦士”の存在を心強く感じているに違いないと思うのだが、そんな自分の考え方は思慮が浅いのだろうか　グランの表情を見ながら、少し胸が重く感じるレアランだった。

話が一段落し、グランが自分に笑顔を向けてきた。その雄々しい表情を見ると、心の重みもすっと解消されていくかのように感じる。笑顔に微笑みを返しながら、レアランは強く想った。

“心配しないで下さいませ。貴方の笑顔は、貴方の存在はこんなに
もわたくしを勇気付けてくれています。だから　御自分に自信を
お持ちになって。貴方は、今でもこんなに大きな存在なのですから”

グランは、レアランの微笑みに自分の内面を見透かされた思いだ
った。

“そうさ、俺が求める力とはたった一人を守り通せるだけでいいん
だよな！　もっとも国やら国民も付いてきてしまうんだが・・・まあ、
いいか！”

如何にもグラン的に考えを帰結させると、レアランに豪快な笑み
を返した。

封印の門 - 16 「悪鬼の侵攻」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「遅れて、すまない」

真摯に詫びる言葉を口にする、ヒラリーは空いている椅子に腰を下ろした。にこにこ笑いながら、デインジルも彼女の行動に倣う。

「お待たせしました」

最後に入ってきたレムリアは、丁寧に頭を下げると椅子に座った。不思議と、部屋の雰囲気は柔らかに変わっていくのだが、これも“人の和”を大切にするレムリアならではの力なのか。

「ケインはまだみただけど、後で詳細はこちらから話しておくので、話を始めてもいいんじゃないかって思うけど？」

「確かに。貴重な宰相殿も時間を、我らは唯でさえ浪費しつつある話を進めるのは賛成だ」

「他の皆様は如何でしょうか？」

話を纏めるように、レムリアが聞く。

「方々。思うに・・・」

レムリアの言葉を受けて話し始めたカイファートの言葉は、唳々と吹き鳴らされる角笛の音によって遮られた。

「む。これは警告の角笛。何か大事が起きたのか。」

冷静にも壁に立て掛けてあった己の剣を手取るのと、伝令が扉を叩くのが同時だった。

「入れ。」

「報告です！ 強力なオークの襲撃団が水晶の霧山脈より現れ、平野部に侵攻中との報告が西の砦よりありました！ その数、一万は下らないということです！」

「ふむ……一万とはな」

低く唸るも、流石は偉大な宰相。躊躇したのは一瞬だった。

「大公女殿下。即刻必要な手立てを取らねばなりません」

「はい、判っております」

毅然として顔を上げ、レアランはグランとカイファートに言った。

「遊撃軍の第四連隊に連絡。訓練を切り上げて公都郊外に集結のこと。中央軍と飛翔軍の出撃準備。指揮は 大戦士殿。あなたに御願います。それから、コーランド軍司令官のレスコー卿に、至急わたくしが話たいと伝えて下さい」

レアランの瞳には、強い輝きが宿っていた。

「カイファートさま。龍騎聖の方々にはわたくしから事態の説明に参ります。出来ましたら、戦力が出払う公都の防衛に力を貸して欲しいと、御願致します」

「宜しいでしょう。わたくしは、戦える者全てを武器庫に送り、公都防衛の為の予備戦力を集めましょう。それから、魔導士に命じて騎士団領と王国に急をつけましょう。コーランドのラーライン女王

陛下は、必ず更なる援軍を出して下さるうかと思えます」

「御願いで下さい。手遅れになってからでは、どの様な助けも無駄となります」

「判り申した」

「心苦しい限りですが 皆さまも、ご助力頂けると助かります。伏して御願ひ申し上げます」

深々とレアランはこうべを垂れた。

封印の門 - 17 「戦力の結集」

ジヨフ大公国 / 宮殿 / 宰相の部屋

「任せる！」

レアランの言葉を受けて、グランは勢い良く席を立った。

「部隊の緊急出動だ！ 定数割れでもかまわないから掻き集めるだけ投入する。戦力の逐次投入は避けたいが、錬度の低い第四連隊は予備兵力とし主力は中央軍とする。LAG（親衛騎士団）も当然出撃だ。俺は直接陣頭指揮を執るが敵の陽動の可能性も考え、カルフアートには戦線後方を含め全体の把握を頼みたい」

そして、グランにしては珍しく、敢えてレアランに気を使わせなために珍しい台詞も用意した。

「この緒戦でジヨフの軍隊の有り様を諸国に見せるぞ！！」

だが、大げさな台詞の割には極めてグラン自身は冷静だった。

“出来れば楽に勝ち、無為に兵の命は失いたくないものだが・・・
そうも行かないのが戦と言うものか・・・”

己自身の命を戦いに掛けるなら何も厭わなかったが、多くの将兵を巻き込むことには、グランは強い抵抗を感じた。

「・・・むろん、我らにできることがあれば。」

エリアドはレムリアの顔をちらりと見て小さくうなづき、レアラン姫の言葉にそう応じた。

“・・・それにしても、ジョフの軍隊の有り様を諸国に見せるね。”

小さく微笑んで、グランの言葉に続ける。

「・・・そういうことであれば、“^{ワーデン}守護者”たる御二方はともかく、私やケイン殿のように、 magari なりにも“他国”に所属している者は、表立ってはあまり派手に動かない方がよさそうですね」

“・・・とすれば、こちらの役どころは“遊撃隊”といったところか。”

「まあ、あちらの出方次第・・・になるのでしょうか」

“・・・彼ら　黒のアルカナたちが、絡んでいなければよいのだが。”

とそこまで考えてから、エリアドは、あの夜の彼女たち　黒の女王と黒の巫女の言葉を思い出す。

『・・・貴方たちの活躍に敬意を表して、私たちはこの地を去りましょう。』

『もうこれ以上、・・・私たちがこの地の戦いに関与することはありません。』

それはゴルナ奪還の夜。宮殿最深部の“喪神の宮”の跡地で、彼女たち二人と交わした言葉だ。その言葉が真実である保証など、どこにもありはしないのだが、しかし、それでもエリアドには、その言葉が嘘とは思えなかった。

“・・・もつとも、彼女たちの言った“私たち”が、“黒のアルカナ”全員を指しているとも限るまいが・・・。”

だが・・・、少なくとも、あの二人の関与はあるまい。”

そう思えた。

「・・・あるいは、“龍泉峽”の御三方は、ある程度、このことを予想しておられたのかもしれないね。

もしそうだとすれば・・・。先に彼らの元に行き、話を聞いておく方がいいのではありませんか。」

エリアドは静かにそう続けた。

封印の門 - 18 「心強き援軍」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

エリアドの意見の後、グランは渋面を浮かべて言った。

「今回の進入がただのオークどもの馬鹿騒ぎなら良いのだがな」

やや苦笑いした後に続ける。

「それ以外の“闇の勢力”が介入しているなら、当然俺だけでは手に負えないだろう、それに備えて自由に動いてもらいたい」

グランにしては、何時に無く饒舌に話していた。

「龍騎聖達とゆっくり話もしたかったが、それは卿らに任せるとして、俺は早急に中央軍及び第4連隊の指揮官と打ち合わせをしよう」

グランの頭の中では、相手を迎撃するのに適した地形を選び、相手の機動力を削ぐ防御陣を形成する一軍と、そこから打撃として打って出る機動戦力の二隊の考えが浮かんでいた。当然ながら、自身機動部隊の指揮を執るつもりであったが、要となる防御陣の指揮官と調整をする必要があった。

“こんな時にこそ副官だったアランが居てくれたなら！”

まだまだ人材は不足していることを痛感してやまなかった。

「飛翔部隊は準備が出来次第敵戦力の偵察を行ってもらいたいが・・

・
」

急に言葉の力が落ちると、グランはちらりとレアランを見る。正直言つて、飛翔軍に関しては些か苦悩している点があった。空中偵察の大きな利点は判るものの、得体の知れない相手に対し単騎レベルの敵中進出での強行偵察は危険すぎると思うからであつた。

「いや、まだ早いな、危険すぎる。今は斥候の報告でかまわないから飛翔軍のスタンバイだけは掛けて欲しい」

だが、そこまで話を聞いて、義務に対して人一倍意識が強いこの方が黙っている訳が無かつた。

「空中からの偵察は、最も効果が高いと考えます」

グランの目を正面から見つめながら、レアランは毅然として言つた。

「故に、大戦士さま。お言葉を返すようですが、飛翔軍の三騎の準備が整い次第、最も効果的に投入されることを希望します。カイファートさま、ケイセルとパリスに準備せよ、と伝えさせて下さい」
「御意。その様に致しましょう」

「おいおい・・・」

グランが止めようとする間も無く、カイファートの指示を受けて伝令が飛翔軍の二人の騎士の元に走っていった。時を同じくして、拍車を鳴らす足音が廊下に響いた。寸刻の後、ノックが続く。

「入りました」

「失礼を申し上げます。ジャン・バルトであります」

「おお、バルト卿。良いところに来た」

入ってきた初老の騎士を見たグランが珍しく相好を崩した。
レオン・“ロック”・ジャン・バルト。LAGの筆頭騎士にして、
古参の騎士の一人である。

「警告の角笛を聞き、僭越ながら馳せ参じしました。コーランド
北遣軍司令官のレスコー卿殿も、当職に同道されておりますが、入
室して頂いても宜しいでしょうか？」

「構いません。入れて差し上げて下さい」
「はっ、大公女様！」

拍車を鳴らして一礼すると、ジャン・バルトは扉の外に声を掛け
た。

「失礼致します」

外で待っていた人物は、入室するとレアラン優雅に頭を下げた。
端正な表情をした、長い黒髪に黒い瞳、細身で長身の女性で、胸甲
騎兵の鎧の上にコーランド近衛を顕す白と紫の外衣を身に纏ってい
た。

「コーランドのトリアノン・レスコーでございます。お国の危機、
と聞いて参りました。コーランド北遣軍は即応体制が整っております。
何時でも、ご指示を拝命致します・・・」

トリアノンの言葉が終わらぬ内に、レアランは非我の数歩を詰め
ると、白い手袋に包まれたトリアノンの手を握った。

「レスコーさま、本当に・・・心からご助力に感謝申し上げます」

「お役に立てれば、欣快に思います」

トリアノンの方が身長が高いので、少し見下ろす形になる。理知的な輝きが宿る黒い瞳が、海の青さの優しい瞳を覗き込む。

「既にお聞きになったかも知れませんが、西の国境をオーク・レイダーに侵入されました。数は一万との報告が入っております」

「はい。状況は聞き及んでおります」

「状況は予断を許しません。大戦士さまを初めとして、心ある勇者の方々が我が国に助力を頂けますが、それでも数に不安があります」

「ご判断、妥当だと当職も考えます。例えオークと言えども、一万の戦力は決して侮れません」

「既にご援助頂いている状況で心苦しいのだが　貴国の女王陛下に更なる助力を御願いせねばならないと思うが　レスコー胸殿、如何かな？」

二人の所に歩いてきたカイファートは厳しい表情を浮かべた。

トリアノンは頷いた。

「私も、宰相閣下のご判断を支持申し上げます。僭越ながら、既に早馬で現状を我が王都の女王陛下にご報告致しました。すぐに、更なる援軍の願いを送りましょう」

「忝ない、レスコー卿殿」

「有り難う、レスコー卿さま」

「トリアノン、でお願い致します」

微笑んでトリアノンは二人に返した。

「方々も、是非私の事はトリアノン、とお呼び下さい。肩を並べて共に戦う戦友です。少し気さくに呼んで頂いても、問題ないと思い

ます」

「わかりました、トリアノンさま」

レアランに和して、部屋にいた皆もトリアノンと呼びかけた。不思議と、それだけでも連帯感が深まる思いがするのだった・・・。

封印の門 - 19 「己の勸を信じて」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「・・・」

無言で事態の推移を見守るヒラリーの耳に、静かな囁き声が届いた。

「唐突だね。なにやら焦臭いなあ」

「思うところがあれば、皆に言うが良い」

「単なる勘所なだけだね・・・」

語尾を濁す相手に、ヒラリーは横目で厳しい視線を送った。

「何かを感じたのならば、はっきりと言えはいい。」

「いやね・・・数を出しての陽動、だが実際の目的は別物って考え方もあるってことさ」

「根拠は？」

「無いさ」

「・・・」

訝しげに向けた鋼の瞳に、酷薄な笑みが飛び込んでくる。

「冗談を言ってるのでは無いな？」

「“己の信ずるコトを為せ” “灰の預言者”の言葉さ。久し振

りに、その実践の時が来たってとこだね」

「・・・ならば、判った。我らは、独自に調べるとしよう」

「そう来なくちゃ」

少しは真剣になればかりに相手をひと睨みすると、ヒラリーは立ち上がって全員に向かって言った。

「済まないが、思うところがあるので我らは別行動とさせて貰いたい。斯様な事態に、戦力を分割する愚は十分に理解している。だが・・・」

「ちよいと感じるところがあつてね」

皮肉な笑みがディンジルの口元に浮かぶ。

「それを解明しないと小心者の私は、枕を高くして眠れないからね。それにね、寝不足は美容の大敵だからね。お嬢さんも肌の曲がり角。それもすごく心配で・・・」

『ゴキッ』

凄く痛そうな擬音がして、くたつとディンジルが地面に沈んだ。その痛ましい（？）姿と米神に青筋を立てたヒラリーを、皆はなるべく見ない様に顔を背けた。

「・・・それでだ。我が儘を言わせて貰って恐縮だが　この者は実に自堕落でちゃんぽらんだが、嗅覚と感だけは動物並みだ。今は、それを信じてみたい」

ヒラリーはそう言うと、皆に頭を下げた。

「紫の騎士さま、その様な事をなさらないで下さい！　皆さまが、本当に必要な事を為される　それが、引いては今の状況を打開する可能性を広げると、わたくしは思います」

毅然と言うレアランに、今一度ヒラリーは頭を下げた。

「ご理解頂き忝ない、大公女殿下。必ずや、我らなりの打開策を見出そう。デインジル、行くぞ」

「はいはい。そう言うことで、ちよいと失礼しますよ」

何時の間にか復活していた不良青年は笑みを浮かべて事投げに言う、生真面目な麗人の後に続いて戸口から出て行った　いや、戸口で立ち止まると振り返って言った。

「エリアド、ジャンニ。そう言うことだから、あんたらはお姫さんとグランの助力を頼むよ」

ヒラヒラと手を振ると、慌てず騒がず、先に出て行ったヒラリーの後を追った。

封印の門 - 20 「緊迫する状況」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「・・・続けましょう」

一陣の風の様にヒラリとディンジルは立ち去った。気を取り直す様に一座を見回したレアランの表情には、強い決意が浮かんでいた。

「空中からの偵察の利点は言うまでもありません。国と民の危機にあつて、わたくしは少しでも自分が出来る事をやりたいのです」

レアランの反応は、当然グランにも予想されていたものだった。心の内の動揺を押し隠し、努めて冷静にグランは言った。

「判っています。しかし、予想される危険には十分に注意してほしい。貴女の情報は確かに重要だが、それ以上に貴女の実在はこの国にとって重要ですからね」

「はい。十分に気をつける様に致します」

グランは頷くと、視線を宰相に戻した。

「斥候と飛翔軍の情報をまとめられる情報部を急ぎ卿の配下で組織してください」

「その通りに手配致しましょう」

カイファートはグランに重々しく同意する。

「偵察によつて得られる情報により、オークどもの中心に何が居るのかを明確にする。ヒラリーとディンジルの情報と併せて、“それ”を速やかに無力化する。良く言つて臨機応変、悪く言えば行き当たりばつたりになるが。まあ、いつもの冒険と同じレベルだな、これではな」

にやりと笑うと、グランはぐるりと取り巻く顔を見回した。

「他に意見が無ければ軍の調整に入りたいが？」

「相手方のこの行動が陽動と考えますと、事態は大分複雑になりますな。相手に“真の目的”があるとすれば、それが何であるか至急把握する必要があります。普通に考えますと、ジョフを崩壊させる為に大公女殿下が大戦士殿を標的にするだろうと言うところですが、現状を考えると、斯様な単純な事柄ではないと思われれます」

カイファートが事態を整理して行く。

「この件の解明は、ヒラリー殿とディンジル殿にお任せするほか無いでしょう。我々に求められているのは、お二人が“真の相手”を見いだす間、戦線を支える事と考えます」

「僭越ながら、当職から軍の状況を報告致します。辺境に展開中の軽騎兵第一〜第三連隊の戦力が1,100。公都に集結している全戦力。これは軽騎兵第四連隊、親衛騎士団、装甲騎兵連隊、装甲歩兵連隊の事です。は837名に過ぎません」

LAG親衛騎士ジャン・バルトに続いて、コーランド北遣軍司令官トリアノン・レスコーが発言する。

「私たちコーランド北遣軍は総数で3,500名です。何時でも、臨戦態勢は整っております」

「辺境に展開している遊撃軍の第一、第三軽騎兵連隊は動かさせませんから、前線にいる第二軽騎兵連隊を含めても、戦力比は1：2ですな」

話を引き継ぐように、カイファートが続けた。二倍の戦力比
装甲騎兵と装甲歩兵の実戦力を倍と考えても、絶対数で半分以下である。

「公都から戦える者を全員集めたとしても、1,000程度に過ぎないでしょう。この者達には意欲はともあれ、練度は全く期待できません」

「装甲歩兵の一部を彼らの中に混ぜて、補強するという手立てもあります」

「補強か　ふむ、それは悪くない考えかもしれない、ジャン・バルト卿」

「恐縮です、宰相閣下」

非我の戦力比は1：2で劣勢。その事実が全員の心に重石を乗せるような感じを与える。

「大公女殿下、大戦士殿。現状では、前線の遊撃軍を除き、手元の戦力はレスコー殿のコーランド遠征軍を含めて約5,000といったところですよ。打って出て野戦を挑むのか、公都に籠城して援軍を待つのか。どの様に戦うか、方針を決めねばなりません。但し、公都は先の戦いで修復作業が完全ではなく、東部と南部の城壁にまだ切れ目が残っています」

カイファートの言葉を聞くグランの目に、何時に無い真剣な物が宿る。

「本来は籠城戦に持ち込むのが上策だ。しかし其処に勝機があるのか？ 何れは援軍が現れ包囲する敵を挟み撃ちにすることも出来るであろうが、俺としては市民を巻き込んだの戦いは考えたくは無い」

場の全員に対し言葉を続ける。

「これは個人的な発案だが・・・少数をもつて多数を倒す戦術は基本的に邪道だ。それをして事の可能性を問いたい。肝心なのは、機動防御戦術と奇襲だ。正確には防御とはいえないが防御部隊には敢えて負けてもらいたい」

含みありげな台詞を用いて、グランは周囲を見渡した。当然、騎士たるものに「負けよ」と言う理不尽を敢えて引用している自分の非も理解済みではあったが。

「オーク・レイダーはHORNWOOD北西部の山地から現れ、HORNWOODとOYDWOOD間の“中央回廊”を南下してきております。この両方の森に騎甲戦力を配置して、後ろからオーク・レイダーを奇襲する手が考えられます」

「騎甲戦力とは、どの部隊を使うのだ、バルト卿？」

「恐れながら宰相閣下。装甲騎兵と軽騎兵第四連隊が一翼を、レスコー殿の重騎兵連隊をもう一翼に、と考えました」

「公都への道はどうするのだ？」

「残った装甲歩兵連隊にコーランド北遣軍にて正面を支えます。市民が編成する義勇軍には、公都の城壁を護って貰います」

「その考えに、コーランド軍は賛同します」

ジャン・バルトの計画に、トリアノン・レスコーが同意する。

「3、350名で少なくとも正面を支えて、更には後方から騎甲部

隊の奇襲が始まったら、支えるだけではなく、相手を押し返さなくてはね」

「その通りです。それにより、オーク・レイダーは北へ壊走しまし
よう」

<ジヨフ公国軍>

司令官：アルフレッド・グランツェフ

遊撃軍

軽騎兵第一連隊 370騎（北部）>M16< 指揮：ルー・リ

エス

軽騎兵第二連隊 400騎（西部）>M16< 指揮：ギー・ガ

ルダン

軽騎兵第三連隊 330騎（南部）>M16< 指揮：メラジム・

ガントウーム

軽騎兵第四連隊 350騎（公都、訓練中）>M14< 指揮：

マイラム・トランター

中央軍

装甲騎兵連隊 120騎（公都）>M18< 指揮：フレム・

リュティエンス

装甲歩兵連隊 350名（公都）>M17< 指揮：カーム・

ゴーター

飛翔軍

飛翔連隊 3騎（公都）>M19< 指揮：レアラン大

公女

親衛騎士団

LAG 17騎（公都）>M19< 指揮：ジャン・

バルト

<コーランド北遣軍>

司令官：トリアノン・レスコー（キャルド・シュヴァリエ）

重騎兵第二連隊	500騎	>M18<	指揮：ルージ・デ・ラ・
ポルタ			
重歩兵第三連隊	1000名	>M18<	指揮：アマン・トウー
ロン			
軽歩兵第六連隊	1000名	>M17<	指揮：フィリップ・コ
ルベール			
軽歩兵第八連隊	1000名	>M17<	指揮：カレン・ケイス
ナルド			

封印の門 - 21 「騎甲戦力で叩け」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

いつしか執務室は軍司令部の様相を呈してきていた。

グランは、自分の意見がやや抽象的過ぎたことに気がつき少々の補足説明を行った。

「作戦そのものに依存は無い。俺が思うのは先手は敵に与え、我らは『後の先』の戦術を取りたい。つまりは防御陣には高度な柔軟性を持たせ、敵を引きずり回すことにより攻勢に対処する。」

当然、勢いに乗る敵前面の指揮官の苦勞は察しがつくが、敵の一時的なものにせよ攻勢限界点か隊列の乱れに乘じ、側面もしくは背後から伏兵たる機動戦力を局地的に投入する。

危険な手法ではあるがより効果的に打撃を与えられるのではないか？」

周囲に考えが浸透するように一拍置くと先を続けた。

「それと、付け加えるなら我が伏兵は両翼の森に配するのではなく、片方は陽動としてダミーとし、戦力の集中的運用を図ってはどうか？」

グランの説明に、ジャン・バルトが復唱する。

「公都正面に相手を出来得る限り引きつけた後、両翼が後方を遮断して包囲殲滅戦に入るという大戦士殿のお考えには、当職も原則賛成です。しかしながら、片翼だけで包囲戦を行うことに関しては、些か懸念を覚えます。レスコー殿の重騎兵連隊は兎も角、他翼を担

当する我が軍の2/3は練度不足の軽騎兵第四連隊です。包囲攻撃の“やつとこ”を形成するのが精一杯かと考えます」

場の雰囲気を変えず穏やかに発言する辺りは、流石に経験を積んだLAGの筆頭騎士と言ったところだろうか。

「騎兵は走り続けている限り、相手に補足されることはありません。故に寡兵であっても、包囲網を支えられると考えられます。しかし、そうは言っても絶対戦力自体は不足しております。故に両翼には単一の作戦目標を与えることにしては如何でしょうか」

「結構だ」

筆頭騎士の発言が終わるのを待ってグランが発言した。流石と思わせる雰囲気と内容にグラン本人も満足していたが、考えを絞り込む為に一つの質問を加えてみた。

「今回の戦闘はやはり包囲殲滅戦に持ち込むべきか？ 多勢相手にしての無勢、大きな一撃を与え壊走させる事を目的とするのではやはり甘いかな？」

些かグランらしからぬ発言とも思えたが、ジャン・バルトは生真面目に返答した。

「寡兵である我が方が、相手方を完全に包囲殲滅することは非常に難しいでしょう。騎甲戦力にて出来得る限り相手方を混乱させ続け、その間に守備位置から前進攻撃に転じた基幹戦力の歩兵部隊が敵軍を追撃する計画であれば、相当の打撃を相手に与えられると思います。即ち敵を壊走に追い込み、その過程で可能な限り敵戦力を削減し、元来た場所に追い戻すことが肝要かと考えた次第です」

ジャン・バルトの言葉を引き継ぐように、コーランド北遣軍司令官のトリアノン・レスコーが穏やかに発言する。

「現在の戦力と状況ですと、とるべき方策は限られているように思えます。私たちの強みは、相手方を上回る機動力があることです。う。騎甲戦力の有効投入が、全ての鍵を握っているでしょうね」

差し出がましい言い様ですが　と柔らかな笑みを浮かべてトリアノン・レスコーはそう結ぶ。

「ふむ　公都の城壁に寄って戦うのは下策だと言うことか。“積極的な攻撃こそが、己の弱点を補填する”と恵久美流公国の龍王が昔言ったと言われているが、苦境にあつてこそその逆転思考ということだな」

額に縦皺を寄せて、カイファートが溜息を付いた。

「何れにせよ、騎甲戦力が包囲作戦に入るまでの暫しの間、正面を支える歩兵部隊にとって厳しい戦いになるだろうな」

グランは唸った。一時的に、三倍もの相手を支えるのである。功囲に持ち込まれたら、逆に包囲殲滅されかねない危険性がある。

「大戦士殿。意見も出尽くしたことですし、作戦と各部隊の指揮官を決めては如何か？」

カイファートが議論を纏めるよう一座を見回して言った。

封印の門 - 22 「公都に御旗を」

ジョフ大公国／宮殿／宰相の部屋

話は出揃ったようだ。グランは深く息をつく、走り書きした自分のメモを見ながら最終的な決定を下した。

「まず敵正面に布陣し、最も重要な任を帯びる部隊は次の通り。

ジョフ公国軍装甲歩兵連隊	350名
コーランド北遣軍重歩兵第三連隊	1000名
コーランド北遣軍軽歩兵第六連隊	1000名
コーランド北遣軍軽歩兵第八連隊	1000名
総兵力	3,350名。

次、HORNWOOD方面に布陣する機動軍。

コーランド北遣軍重騎兵第二連隊	500騎
司令官はトリアノン・レスコー殿。	

次、OYDWOOD方面に布陣する機動軍。

ジョフ公国軍LAG	17騎
ジョフ公国軍中央軍装甲騎兵連隊	120騎
ジョフ公国軍軽騎兵第四連隊	350騎
指揮は私が直接行う。	

ジョフ公国軍軽騎兵第二連隊400騎は万が一に備え公都方面へ移動しておくこと。

後方及び総参謀長としてカイファートを任ずる。

ジョフ公国軍飛翔連隊 3騎はカイファートの配下とし、情報収集に努める。

さて、最大の問題だが一番の苦戦を強いられる敵正面守備隊の指揮官だが、我と思うものはいるか？」

「その任、わたくしが引き受けましょう」

澄んだ声には、欠片も迷いが感じられなかった。瞳に強い輝きを宿し、ジョフ公国大公女レアラン・ルーフィウス・ラ・ジョフはその決意を述べた。

「大公女の旗を戦線に掲げれば、兵にも公国民にも励みとなりますよう。そして、それは大公家の者の勤めでもあります」

その言葉には、意思の力が強く感じられた。聞いていたLAG筆頭騎士ジャン・バルトが一つ頷くと、口を開いた。

「大戦士殿。大公女殿下を補佐する為、LAGより当方を正面戦線に配置ください。お願い申し上げます」

「・・・はあ????」

流石にグランも、こればかりは読んでいなかった。ジャン・バルト、カイファート、トリアノン・レスコー、と優秀な騎士、幕僚、友軍司令官に恵まれてはいたが、それぞれの持ち場があり、また戦線正面はジョフとコーランドの混成部隊になる為、悩んだ結果指揮官の推挙を問うたのだが・・・。

「・・・」

暫くの沈黙の後。

「レオン・“ロック”・ジャン・バルト、卿を我がもとより離すの

は百騎の精鋭を失うに等しい。だが大公女を守る任は、それに変えられないものである。頼むぞ！」

「有り難き幸せ。我が命に代えましても、大公女殿下はお守り申し上げます」

立ち上がると、深々と頭を下げるジャン・バルト。少なくとも、百戦錬磨の筆頭騎士が付いていてくれれば、とグランは思った。そもそも、国の元首であるレアラン自身が“陣頭指揮を執る”と言った場合、一体誰が止められるのか。正直、グランは頭痛がする思いだった。

何はともあれ、釘だけは刺しておかねばなるまい。心の中で溜息をつく、グランはレアランの視線を正面に受け止めて言った。

「一瞬でいい、チャンスを作ってくれば必ず私が敵を粉碎する。信じてくれますね」

「はい。元より兵法の知識も有りません。足手纏いにならないように、旗だけを持って頑張ろうと思います。それに、ジャン・バルトが来てくれるので有れば心強い限りです。大丈夫。大戦士さまとレスコーさまが相手の後方を断つて下さるまで、精一杯戦線を支えましょう」

微かな笑みを浮かべて、レアランは静かに言った。気負いも迷いもなく、ただ自分が為すべき事柄を理解している。そんな表情だった。

「私からも、出来得る限りの後方支援に努力しましょう」

その場をカイファートが引き取った。

「では、大戦士殿。作戦開始の下知を頂けますかな？」

「うむ」

グランは厳肅にカイファートの言葉に続ける。

「私の求めるものは勝利か死ではない」

周囲を見渡した後。

「勝利か・・・より完全なる勝利である！」

甚だ大げさだと思いつつ、士気を鼓舞するのも責任者の役目と思
って恥ずかしいものを我慢して、グランは思いつきり言つてのける。

「一時の準備の後、全軍城外にて集結。閲兵の後にそれぞれの持ち
場についてもらう。以上、解散！！」

かかと
踵を鳴らすと、満座に対して敬礼をした。

封印の門 - 23 「それぞれの決意」

ジョフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「大公女さま」

グランから散会宣言が出た後、レムリア姫はそつとレアラン大公女に歩み寄った。

その表情には心を安らげる様な不思議な笑みが浮かんでいる。

「レムリア姫さま？」

「一つ、我が儘を申し上げることをお許し下さい。わたしも、大公女さまとご一緒しようと思います」

「しかし、レムリア姫さま！！ わたくしのところなど・・・斯様な危険な場所に、貴女さまにいらして頂く訳には参りません！」

レムリアの言葉に驚いたレアランの声が思わず高まる。

しかし、そんなレアランにレムリアは諭すように続けて言う。

「お聞き下さい。わたしも大公女さま同様に、ヴェロンディでは“盾を持つ乙女”の立場です。お国の存亡に係わる事態にあって、どうしてわたしだけ安全な場所に引っ込んでいられましょう」

そう言い切ったレムリアの双眸には、深い輝きが宿っていた。

レムリアの言う通り、この時代の女性には二通りの生き方がある。一つは“誰かに護られる立場”。宮廷の姫君や貴婦人など、高位の婦人の殆どが自然とこの立場になる。稀に、この立場を潔しとしない女性がいる。稀に、この立場を潔しとしない女性がいる。 “紫の騎士”ヒラリーや後世の“紅い龍騎士”カ

ーシャ・ラダノワが著名だが、身分的にこの立場に立たざるを得ない女性もいる。それが、ジョフ主権者であるレアラン姫や、フリヨンディの“夢見姫”レムリアだった。前者は、ジョフの公族で唯一残った血筋である為に。後者は、それが背負う運命が故に、安閑とした生を選べなかった為に。

何れの生き方が幸せなのか　レムリアも過去、真剣にその問いを自問したものだ。一つだけ判っていることは、十分な自覚と理解無しには、この生き方が務まらない事だ。レムリアは、その事が骨身に沁みていた。そして、互いの目標は異なるものの、立場的には似ているレアランの事を他人事とは思えなかった。勿論、厳しい経験を積まなければ、この立場を維持していく事は出来ない事も重々承知していた。そうであっても、只でさえ心労が多いこの若い主権者を、レムリアは出来るだけ支えたいと思ったのだった。

「……でも……」

思わず、言葉がこぼれ落ちる。

レムリアの持つ暖かさに励まされながら、尚もレアランは逡巡する。

「大公女さま。僭越ではありますが、わたしでも何某かのお手伝いが出来ると思います。それに、大公女さまの傍らに控えるのは、何もわたしだけではありませんよ」

レムリアは、さり気なくグランに下知された作戦について、声高にやりとりを交わしている人々を指し示した。

「剣の一振り、知恵の一滴たりとも今は必要な時でございます。大公女さまに的確なご判断を必要な時に下して頂く為にも、そしてそ

の御身を害為す者から護る為にも　ひいては、この美しい国であるジョフとその公民を護る為にも、大公女さま、わたし達の我が儘をお受け入れ下さいませ」

「ことだま言霊に力が籠もると言うのであれば、レムリアのこの言葉がそれなのだろう。

「・・・わかりました。レムリア姫さま、宜しくお願い申し上げます」

決意をその表情に浮かべると、レアランはその手をそっと差し出した。

差し出された手をレムリアはしっかりと握りしめた。その手は、思いの外温かった。

封印の門 - 24 「擦れ違ふ想い」

ジヨフ大公国 / 宮殿 / 宰相の部屋

一通りの役目を終え、室内が喧騒に包まれ始めたころグランはどつか椅子に腰を落とした。

「やれやれ第一段階は無事終了と言ったところか・・・」

天井を眺めながら独り言を呟くと、隣でレムリア姫と話をするレアラン姫を眺める。

“ エリアドはレムリアと行くんだろうな・・・

まあいい、他の連中にも自分の思うところで戦ってくれればいい・・・

此処まで巻き込んでしまった俺が言うのも何だがな”

グランは、苦戦が予想される戦闘を前に僅かながら気を抜ける一瞬を楽しんでいた。

そして、一つ深呼吸すると、会話を終えたレアラン姫に話し掛けた。

「私は既に1年分の勤勉と言うものを使ってしまったよ。・・・この戦いが終わったら・・・」

「・・・終わったら？」

大きな瞳を見開くと、グランの言葉を繰り返すようにレアランは聞き返した。それを見たレムリアは小さく笑みを浮かべるとその場を離れ、エリアドの元へと歩いていった。

“邪魔をしては、馬にでも蹴られそうね”

でも、そんな温かい心があるからこそ、そんな想いを守ろうと思うからこそ戦える　そう強く思うレムリアだった。

グランは、レムリア姫の態度を見て改めて自分が何を言ったのかに気がついた。気が抜けていたからなのか、半ば独り言のつもりだったのか、今まで何度と無く胸の内でのみ繰り返していた想い。それに自分勝手な屁理屈を重ねて今に至っていた。

“一年分の勤勉を使っただ、今度は一生分の勇気を示せ、この大馬鹿者が！”

自分になけなしの気合いを入れると。

「そう、この戦いが終わったら・・・」

命のやり取りに於いて、百戦錬磨のグランをして心臓が口からせり出しそうな緊張感が全身を包む。喧騒に包まれ、大勢が居合わせている筈の室内であったが、全てが止まって見える。目の前にはただ一人レアラン姫がいる。

「戦いが終わったら、正式に結婚して欲しい。」

「！！！」

それは、レアランにとって喜ばしい事の筈だった。レアラン自身、グラン以外と添い遂げる事は考えてもいなかった。聞きたかった言葉を、聞かせて欲しかった相手から漸く聞いた　どんなに嬉しいことだろうか。どんなに喜ばしいことだろうか。

だが・・・

ここで自分の心のままにグランに同意してしまうのは簡単だ。だが、これからの戦いの中で、自分の身にも何が起きるか判らない。もしも何かが有った場合、只でさえ異国異郷のジョフと運命を共にしてくれている相手の心を、自分に未来永劫に縛り付けてしまう事にもなりかねない。

“そのようなことは・・・できません・・・”

応えて上げたい言葉を、レアランは胸の奥に封じ込めた。どんなに望んでいても、今はまだその言葉を言う訳にはいかないのだ。そのことを、果たして判って貰えるだろうか　その結果を思うと、
軀が瘻りに罹った様に震えてくる。

ともすれば挫けそうになる気持ちを奮い起こすと、レアランは顔を上げた。何処か所在なげなグランの表情を見上げると、意を決してその致命的な言葉を紡ぐ。

「大戦士さま。今は、斯様な事を語るべき時ではありません。」

胸騒ぎを覚えて、レムリアは思わず振り返った。

“えっ・・・”

打って変わって、蒼白な表情でグランに相對しているレアランを見て、思わず制止の声を上げそうになった。

「っ・・・」

とつさに口元を手で押さえると同時に、致命的な言葉が発せられるのを聞く。

“ああ・・・どうして・・・どうしてなの・・・”

理性ではその決断の正しさを認めながらも、感性はその理解を拒否していた。その時、はた、と思い当たる。

“もしかすると・・・でも、そんな・・・”

夢見になる過程で身につけた自制の力を最大限に発揮して、思いが表情に表れるのを押しとどめる。

“駄目。自分が倒れるかも知れないなつてことを、決して考えては駄目つ。その想いは、貴女に負の結果を招き入れることにもなりかねない・・・”

レアランの胸の痛みがレムリアの心を根底から揺さぶるのだった。

「・・・・・・・・」

グランは思わず一つ大きな溜息をついた。こんな事態なのに、意外にもグランは徐々に自分が冷静になっていくことを感じていた。

“やれやれ、次の台詞が出てきやしねえな”

レアラン姫の言葉を「額面通り」受け取ったグランは、やや肩を落としながら沈黙を続ける。

“まあ、言つべきことは言つた事だし、駄目なら頭を掻いて御免なさいつて事か・・・まさかな！”

自分で気合いを入れようと無駄な努力をするが、一向に意気が上がらない。

「・・・」

“駄目だ、俺様としたことが言葉が出ないぜ。だが、このままじゃ不味い。後の戦闘に支障を来たす事になる。どうするか・・・”

「あ・・・」

大きく溜息を付くと、グランの表情がやるせないものになつていく。

後悔と自責の念が、レアランの体の奥底まで染み通る。

必死に、必死に踏み止まろうとする　だが、心の奥から何かが溢れ出してくる。そして、その想いは滴となつて瞳を潤した。

「大公女さま、ご気分でも悪いのでしょうか？」

心配そつに　LAG筆頭騎士が尋ねる。その、ジャン・バルトの言葉が引き金になつたのだろうか。押し留めていたものが、堰を切つたように溢れ出すと早瀬となつて頬を下つた。

「くっ」

失望と混乱の極地にあつたレアランは、溜まらず宰相の部屋から逃げるように走り去つた。

封印の門 - 25 「放浪の戦士」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋

「く・・・」

グランは奥歯を食い縛った。先程の、レアランの拒否の言葉が胸に突き刺さる様だ。

“最悪だよ、最悪！！”

自分を痛罵しても、何の役にも立たない。更には、ここまで高めてきた緊張の糸が完全に切れたのか、席を立ったものの足に根が生えた様に立ち尽くすだけである。

「くっ・・・」

なんて無様な、とグランは思った。レアランの後を追うべきなのだろうか、それとも一人にさせるべきなのだろうか。だが、混乱する頭に明瞭な考えが浮かぶ訳もない。

思わず、握る拳に力が入と、爪が手のひらに食い込んでいる。そして、その痛みがグランに現実を思い出させてくれた。

“己の軽率さと後悔より、今は成すべき事があるはずだ！！”

グランは己の克己心を振り絞ると、近くに居るジャン・バルトに命じた。

「ジャン！ 悪いが俺に一発気合を入れてくれ、命令だ！」

「はっ、し、しかし・・・」

幾ら畏敬する大戦士の命とは言え、さしもの剛勇ジャン・バルトも躊躇した。

だが、主従の逡巡は、思わぬ合いの手によって待ったが掛かった。

「あのね、自分の不甲斐なさを部下に転じて解消、なんていうのは実際下の下だと思うけどね？」

どこか緊張感に欠ける間延びした声だった。何処から来たのだろ
うか？ 草臥れた旅装束をだらしなく着込んだその男は、何かの草
の茎を銜えながら何時の間にか戸口に寄りかかって立っていた。

「怒る前に、アンタは成すべき事があるんじゃないのかな？」

にやりと笑った表情は、若いとも老けているとも言える、不思議
なものだった。

「何奴っ！！」

啞然とした状態から最初に脱却したのはジャン・バルト。抜く手
を見せずに腰から抜刀した長剣を、男は事無げに二本の指で押さえ
てしまう。

「なんと！ 当職の剣を指だけで押さえるというのか！」

「そんなに焦らない焦らない。ボクは、少なくともキミたちの敵じ
やないよ。剣を仕舞ってくれないかな？」

「むう・・・」

二本の指だけで押さえられている剣を、剛勇を持って鳴るジャン・

バルトが微動だにさせられない。低く唸るジャン・バルト。筆頭騎士を手玉にとる相手とは、どんな技量の持ち主なのだろうか？

「貴様・・・何者だ？」

「そうだねえ・・・」

涼しげな顔で一考。そして、そうだったと屈託無く笑う。

「放浪の戦士”シレイナス。これで行こう！」

“これで行こう”とは何だ！！それが汝の本名か！」

「うゝん、“放浪の戦士”の本名はね・・・確か、サリアン・リパニアンだった筈だね。そう、サリアン・リパニアン。なんてったって聖戦士！ってヤツさ」

相手ペースの物言いに、実直なジャン・バルトは目を白黒させている。

「バルト卿、下がれ。そいつが用があるとすれば相手は俺だろうよ」

新たな侵入者に、グランは感謝した。グラン最大の悪癖『戦いになれば嫌なことは忘れていられる』からである。今までの腑抜けた感情は抜け、戦場での殺気を放出し始める。

「御意っ！」

一礼してジャン・バルトは三步後ろに下がり、グランに道を譲った。無論、何時でも介入できる位置を保持することは忘れない。

「悪いが俺は口の達者な奴は大嫌いだね。少なくとも味方には見えないしな」

「やれやれ。ボクに構っている暇があったら、自分のやるべき事をやった方がいいと思うけどな。まあ、いいさ」

皮肉っぽく笑うと、グランを見やる。

「敵味方の区別くらい付けようよ。言っただろ？　ボクは敵じゃない。だいたい、敵だったらキミも、ここにいる人たちも、とっくにお亡くなりになってるヨ。ねえ、ボクにはそれくらいの實力、あるでしょ？」

最後のセリフは、ジャン・バルトに向けられたモノだった。

「くっ……大戦士殿。確かに小奴、腕がたちますぞ」

「認めてくれて痛み入るよ。さて、どうするかい？　大戦士さん」

斜に構えて、気怠そうに言う割には、“放浪の戦士”の双眸はキラキラと輝いていた。

「……まあいい、敵でない貴様が何用で此処に現れた？」

グランの意識は危険信号を発していた。“放浪の戦士”を名乗るこの得体の知れない男を無視して、レアラン姫を追うわけにも行かない。グランは意識して己の殺気を鎮めようとした。

“こいつのペースに飲まれるとはいかん”

そんなグランにはお構いなく、“放浪の戦士”は軽く肩を竦めると薄い笑みを浮かべた。

「簡単なことだろ？　この地に呼ばれたからさ。いや正確にはこの

時代に、と言わねばならぬ。ボクが“召喚”されるほど、“均衡”が崩れてしまってるんだろ。まあ平たく言えば、キミらには難しい相手が向こう側に付いたってことだろ。うん。

仕方がないなあ、と苦笑する。

「ボクを信用する、しないはキミら次第だね。信用しないって言うのであれば、さっさと立ち去るさ。どうするか、決めて欲しいね」
「・・・ああ信用してやるさ。だから面倒くさい話は後回しだ。貴様は好きなお喋りをここで誰かとしていろ、俺は先を急がせてもらう。」

こんな奴と非生産的な無駄話をしている暇はない。グランは表面を浮かべて思った。それよりも、今は別の急務がある。

拍車を鳴らして、グランは急ぎ部屋を出ることにした。だが、この侵入者にグランは少なからず感謝はしていた。完全に冷静に戻れたからである。

「大戦士殿！ 何処へ！」

足早に部屋を後にするグランを、慌ててジャン・バルトが追う。

「バルト卿、大戦士殿を公都前面へ案内せよ。軍が待っている！」

間髪入れずに、カイファートがジャン・バルトに指示を出す。その言葉に頷くと、ジャン・バルトはグランを追って宰相の部屋を退出した。無論、礼儀正しい騎士である彼は、出口で一礼することを忘れない。

二人が部屋から出て行くと、厳しい表情を浮かべたカイファート

は“放浪の戦士”に向き直った。

「さて。貴公が何方かは判らぬが、斯様な状況下で唐突にここに現れたと言う事実は興味深い」

「痛み入るね、宰相閣下」

「だからといって、諸手を挙げて信用する立場に、我らが無いことも理解して貰えるであろう？」

「勿論ですよ」

「良かるう。暫くは、貴公は私の客人としよう。部屋を用意させる故、そちらに居ては貰えないか」

「いいでしょう。宰相閣下、アナタの度量に免じて、言われる通りにしますよ。で、部屋はどこですか？」

「案内させよう」

カイファートは侍従を呼ぶと、客人用の部屋に案内するように言った。

「では、宰相閣下。これにて失礼します。ボクが入り用でしたら、躊躇無くどうぞ」

笑顔でそう言うと、“放浪の戦士”と名乗った青年は部屋を出ていった。

封印の門 - 26 「心の迷路を抜けて」

ジヨフ大公国 / 宮殿 / 宰相の部屋 廊下

グランの心境は別にして、時の流れは全てに無感動に、無関心に進んでいく。無慈悲な時間の流れは、“時の大神” レンドールにも儘^{まま}ならないものなのかも知れない。

足音高く回廊を歩くグランは、突き刺す様な胸の痛みを抱えながらも、遮二無二前に向かって歩いていった。本人自身も一体何処へ向かっているのか 後を追っかけてきたジャン・バルトに呼び止められるまで判らなかつたのかも知れない。

“今、姫の思いに答えるにはこれしかないのか。一番大切なことは軍を統率して勝利に導くこと、それだけを考えよう。俺にはそれしか出来ないし、誰に替わる事も出来ないのだから”

敢えて自分の心の痛みを無視すると、グランは奥歯がへし折れるほどかみ締めた。そうでもして自分を戒めないと、叫び出しかねなかつた。

「大戦士殿！」

すんでの所で、グランを凶行から思い留ませたのはこの人。ジヨフ親衛隊の隊長であるリオン・ジャン・バルト、通称“ロック”（岩）だつた。その渾名の通り、頑固一徹で融通が利かない反面、その忠誠心は忠臣の中でも群を抜く。

そのジャン・バルトは大腿で歩くグランに追いつくと報告した。

「宰相閣下より、軍の方を頼むとのお話でした。公都前に、L A G（親衛隊）を初めとする全戦力が集結しております。大戦士様、そちらへ参りましょう」

話している最中に、後ろから軽い拍車の音を響かせて、コーランド軍司令官トリアノン・レスコーが追いついてきた。

「お二人とも、早足ですね」

事態が修羅場であれどうあれ、全く動じた様子もなく笑顔で話しかけてくる。その平常心たるもの　伊達にコーランド王国の近衛騎士を拝命してはいない。

「コーランド軍にも集結するように指示を出してあります。ご一緒致しましょう」

「・・・」

ジャン・バルトにも、そしてトリアノンにも、グランは一言も返さなかった。だが、話を聞いている証拠に、グランの足は公都正門に向かっている。

ジャン・バルトとトリアノンは互い顔を見合わせると、無言で歩くグランの後に従った。先程の状況を思い起こすと、二人は大戦士の心中を察してはいたが、国と民の要とも言えるこの人物に、奮起を促さねばなら必要もあった。

さて、此処まで沈黙を守っていたグランだったが、その心の中には一つの引っかかりがあった。

『キミらには難しい相手が向こう側に付いたってことだろうね』

“放浪の戦士”と名乗った相手の、この台詞が頭の中から消えなかったのだ。

「・・・」

幾ら考えても、今は杳^{よう}としてそれ以上が判らなかったのだが。

封印の門 - 26 「心の迷路を抜けて」 (後書き)

漸く、本編が三分割する所まで辿り着きました。思いの外時間が掛かり、お待たせしてしまつて済みません。今後は、各章ごとに更新していきます。宜しくお願い申し上げます。

封印の門 - 28 「閲兵の儀式」

ジヨフ大公国／宮殿／廊下 大手門

グランが公都の大手門に着くと、そこには巨大な戦馬が時や遅しとばかりに主を待っていた。急な出撃で厩舎から引き出されたその黒いスタリオンは『黒王』。グランの姿を見た『黒王』は、半ば従卒を引きずるようにして主の元にゆつくりと歩いてきた。そして、主の心の悩みを見透かしたかのような視線を送ると、早く背に乗れとばかりに嘶いた。

「判っているよ」

絶対の信頼を置く戦友でもある愛馬の首を数度叩くと、グランは小山の様な高さの背に飛び乗った。ほっとした様に、従卒が手綱をグランに渡した。漆黒の巨躯の戦馬は気性が非常に荒く、幾多の戦場を共に生き延びた主のグラン以外は決してその背に乗せない。その愛馬と会話が出来るとは言わないが、グランと『黒王』が気持ちを通い合わせているのは間違いない事だった。

明るい昼下がりの陽光を浴びて唯でさえ目立つ戦士が一際大きく見える。

その身に纏うのは見事な黒い光沢を放つ魔導重装甲であった。聖戦士の洗礼を受け、魔法的な加護を持つその鎧は元来白く輝いていた。だが、グランは敢えて己の親衛騎士団と色調を合わせ、専属の職人により黒に染め抜いたのだ、銘の由来であるルーン文字は金色に輝き、その存在を強くアピールする。周囲の戦友の防御力と比べると若干劣るものの、グランは『ルーンプレート』に身を包み今回

も戦場に臨んだ。

その身に帯びるのは巨大な両手剣。並みの戦士では持ち上げることも出来ない程の大振りな大剣である。鍛え抜かれた魔導鋼の中に炎の精霊の力を宿し、そして“勇気”と“名誉”を司る主神ヘイロニアスの加護を併せ持つ、この世に二振りと存在しない業物である。昨今、この国に眠る秘奥義の秘剣を極めた今となっては、その相乗効果は計り知れないものである。この剣こそが、七本ある“天の聖剣”の内の一本。ヘイロニアス神の加護を受け、闇の者に恐れられている剛剣『チーフテン』である。

決して能力的に人を上回っているわけではない。

武器や武具が史上最強というわけでは無い。

人より魔法が使える訳ではない。

人より器用に戦える訳でもない。

しかし、本人は認めないものの周りは彼のことを「最強」と呼ぶ。そんな一人の戦士が軍勢の前に現れた。

ジョフの公都、ゴルナ市の大手門前には、騎兵と歩兵の集団が集結していた。大手門から向かって右側にジョフ軍、そしてその隣にコーランド北遣軍が整列している。ざわざわとしていたその場の雰囲気は、グランがジャン・バルトとトリアノン・レスコーを伴って大手門より現れた時点でぴたりと止まった。ジョフの戦士達は既に見慣れているが、コーランド軍はグランとその巨大な軍馬『黒王』に少なからず驚いている様子が見受けられた。

グランの背後に、それぞれの軍馬で付いてきているジャン・バルトは傍らを進むトリアノン・レスコーと互いに一つ頷き合うと、一気に前に出た。

「ジョフの戦士達、並びに同盟国コーランドの戦士達よっ！ ジョフ救国の大戦士、アルフレッド・グランツェフ殿であるっ！！」

ぱつと手を振って後ろに立つグランを指し示すと、更に大音声で続ける。

「我らを率いる者の声を、心して聞けい！！」

「おおおっ！！」

ジョフ軍から盛大な、そしてコーランド軍からも控えめなどよめきが聞こえる中、ジャン・バルトはグランの斜め後方に下がり、自分が主と仰ぐ大戦士に道を譲った。

「先触れ、ご苦労様です」

「いや、何。これも小職の勤めですわ」

昂然と顔を上げたまま、ジャン・バルトは隣に立つトリアノン・レスコーに囁いた。

「ジョフ軍の正面に立っているのがLAGですね」

「左様。ジョフ最強の騎士達にして、大戦士殿の信頼も厚い親衛部隊です」

「コーランドで言えばギャルド（近衛騎士団）の立場にある騎士の方々ということね」

「いかにも。」

思わず誇らしげに胸を張ってしまうジャン・バルトに、トリアノン・レスコーは微笑んだ。そう言う彼女も、コーランド王朝で24騎にしか与えられていない、ジューヌ・ギャルド・シュヴァリエ（近衛騎士）の位を女王から拝命している逸材だった。ギャルドの白

い正装に身を固めたトリアノンは、まこと凛々しく見えた。

封印の門 - 27 「深まる懸念」

ジヨフ大公国／宮殿／宰相の部屋 大広間

足早に部屋を出ていったグランをジャン・バルトが慌てて追って行った。それを見たトリアノンも、カイファートに優雅に一礼して言う。

「私もお二人と一緒することに致しましょう」

「そうして貰えると助かります、レスコー卿」

「心得ていますよ。それでは皆さま、これにて失礼申し上げます」

朗らかに言うと、トリアノン・レスコーもグランとジャン・バルトを追って部屋を出て行った。

「さて。我も民兵の編成を急がねばならぬ。まこと恐縮ではあるが、諸卿も今後の策を講じて頂ければ幸いに思う。では、失敬する」

カイファートは大広間への案内を侍従に指示すると、部屋を出ていった。宰相の部屋に残っていた全員は、侍従に案内されて大広間に移動した。

「・・・さて。どうしたものか」

大広間に移動しながら、エリアド・ムーンシャドウは状況を思案していた。

状況はめまぐるしく推移している。

“・・・ただでさえ、ややこしい状況だったというのに、輪をかけ

て、ややこしいことになってきているようだな”

エリアドはは肩をすくめて小さくため息をついた。

「・・・サリアン・リパニアンね。どこかで聞いたことがあるような気がしないでもないが、残念ながらはつきり記憶にはないな・・・」

呟くような独り言はエリアドの癖か。無意識に考えを口に出す。

「・・・グランには悪いと思うが、ここは多少こちらの手を貸してでも、この戦いが不必要に長く続くような事態は避けた方がよさそうだ。・・・ヒラリーやディンシルが、“黒のアルカナ”たちに遅れを取るようなことがあるなどとは考えたくもないが、滅多に人里に現われぬという3人の“龍騎聖”ばかりか、“シレイナス”という謎の戦士までがこの地を訪れたともなれば、彼の言葉通り、容易ならざる事態が起きつつある可能性は否定できまい」

エリアドは、傍らを歩くレムリアの方を見ると、真剣な眼差しで聞く。

「君はどう思う？」

回廊に等距離で置かれた窓からは、大手門前に集った軍勢が見下ろせた。レムリアちらりとエリアドに視線を振ると、静かに言った。

「・・・最悪の予想があります。その様な事態の事を考えたくもありませんが、対処の方策は考えておかねばなりません。現在、最も危険な立場に有るのは大公女さまです。あの方に何か有った場合、公都前面の防衛戦が崩壊するばかりではなく、ジョフ大公国自体の

存亡に係わります」

難問を思考するかの様に、レムリアの眉根を寄せて考え込む。

「更なる問題は、わたしの“夢見の力”が使いにくくなっている事です。その影響はこれまで徐々に進行してきましたが、先程からは予想するのが一層困難になりました。特に、公都の事を想うと、霧が掛かったようになってしまいます」

レムリアは、深く溜息を付く。

「これは、大公女さまに密接に拘わることだと思えますの。そして“夢見の力”を妨げることが出来るのは“夢見”だけ。恐らく、相手方には“夢見の力を持つ者”がいるでしょう」

「・・・ふむ。」

エリアドは暫し思案した。

「・・・もし君が言うように、相手方に“夢見”がいるとすれば、その最大の目標は、必ずしもレアラン姫とは限らないと考えておいた方がいいたろうな。・・・はからずも、君自身が“答え”を言っているのだから。『“夢見の力”を妨げることが出来るのは“夢見”だけ』と。それは、“夢見”にとつての最大の敵は、“夢見”に他ならぬということだ」

そう言うと、エリアドはレムリアの白い顔をちらりと見る。

「・・・むろん、この戦いの最中、レアラン姫が倒れるようなことにもなれば、ジョフは容易ならざぬ事態に陥るだろう。」

だが・・・、相手方に“夢見”がいるのであれば、君が倒れても

同じことになる。“夢見の力”に対抗することができる者がいなくなるのだからね」

“物は考えようだが、こうなるとレムリアがレアラン姫の側に着いていてくれるのは却ってありがたいかもしれぬな。相手が狙ってくるとわかっているのなら、そこに戦力を集中することができるというものだ”

「・・・レムリア。難しいことは承知の上で言うが、忘れてくれるなよ。この戦い、むしろレアラン姫に倒れてもらうわけにはゆかぬ。・・・だが、君に倒れてもらうわけにもゆかぬということだ。・・・もし危地に陥るようなことになった時には、二人が共に助かる方法を考えてくれ」

少しだけ間を置いて、呟くように続ける。

「・・・ある意味、この戦いの趨勢を決めるのは、公都前面の、その戦いということになりかねぬ。“時”が移る前に、できる限りの用意をしておかねばなるまいな。」

まずは、さきほどの“放浪の戦士”殿に。そして、“龍騎聖”の御三方にも協力をお願いしよう。グランとレアラン姫には、この戦さの“表”で指揮を取ってもらわねばならぬ。となれば、“裏”の戦さは、我らの役どころとなるうよ。つきあってももらえるかな？」

「わたしからも、お願い申し上げます。もしも相手に“夢見”がいるとしたら・・・わたしたちの行動は予測されていると・・・」

レムリアは、そこまで話すと蒼白になった。どんな時でも落ち着き払った態度の彼女にしては異常なことだ。

「そんな・・・もしも、わたしたちの行動が予測されていたら・・・
グランさまとレスコーさまの部隊が危ない！ 急ぎ伝令を・・・」
「待たれよ。」

廊下に通じる扉から、不思議な色に輝くスケールメールを身に纏った三人の人物が入ってきた。先頭の背の高い異丈夫は剣を、二人目は槍を、最後尾の女性は弓を持っていた。

「フラネースに名だたる冒険者たちよ。お初にお目に掛かる。我はイアン・サツコウ、剣を司る。こちらは槍を司るハロルド・ネースビー、そして弓を司るエスター・シトールと言う。我ら三騎、世では『龍騎聖』（ドラグーン）と呼ばれている」

お見知り置き願いたい そう言うと、三人とも軽く会釈した。

「我らが参ったのは、まさに今そちらの夢見姫殿が懸念したことを防ぐためにある。喜んで、力を貸すといったそう」

「相手が何方であるか、龍騎聖の方々は見当が付いておいでなのでしょうか？」

「多少はな、夢見姫殿。恐らくは、ドレッド・マスターを名乗る三騎、即ち『黒の魔王』、『黒の恐騎』、『黒の聖女』の三君がこの件に参画しているのは間違いない。我らは、“天の聖域”たる巫女のお告げによりそう聞いた」

「しかるに、ボクまでここに来れちゃっている事実から考えると、相手方のバックに付いているのは、それだけじゃないな」

何時の間にやら、先程唐突に宰相執務室に現れた風来坊が戸口に立っていた。

「貴公は？」

流石に龍騎聖と名乗るだけに、剣のサッコウは闖入者に冷静に応じた。

「ボク？ ああ、ボクはムーチョ・ゲメラ・・・じゃなかった、放浪の戦士ことサリアン・リパニアンさ。以降お見知りおきを頼むぜ」

封印の門 - 27 「深まる懸念」(後書き)

サイドビューの分岐話です。主体はエリアド、レムリア、レアラ
ン、カイファート、ジャンニになります。

封印の門 - 29 「闇の気配」

ジヨフ大公国／宮殿／大広間

「・・・ご丁寧な挨拶、痛み入る。我が名はエリアド。世間では“魔剣士”などと呼ばれているらしい。そして、こちらは、我がパートナー、ヴェロンディのレムリア。御存知の通り、“夢見姫”と呼ばれている。それから、あちらにおられるのが異界からの来訪者であるジャン二殿」

「高名な“夢見姫”にお目に掛かれて光栄に存じます」

三人の“龍騎聖”を代表する形で、剣のサツコウがレムリアに優雅に一礼した。

それに勝るとも劣らず、レムリアが見事な返礼を返す。

一拍おいて、エリアドが続けた。

「このような危急の際でなければ、いろいろ話したいこともあるのだが、状況が状況なので、そのあたりは先送りにさせていただきますことにするが・・・」

ふむ、とエリアドは心の中で唸った。

三人の“龍騎聖”が口にした“天の聖域の巫女”とは、自分の認識が間違っていないければ、白き姫君アレゼルのことであろう。

“・・・とすれば、彼らは、アレゼル殿の意思を知る（識る？）ことができると言うことになるが、龍騎聖の三君と天の巫女の間に、如何なる縁があるのだろうか・・・”

疑問は尽きず、また今現在その答えも有るはずがなかった。

エリアドはこう続けた。

「・・・現在、我らの置かれた状況については、皆それなりに御存知のようだが、これについては、どうやらサリアン殿が一番お詳しいようだ。他に、我らが識^しっておくべきことがあれば、お教え願いたい。他の方々も、必要があると感じた時には、補足をお願いしたい」

そう言つと、エリアドは入り口に立つ男に軽く会釈を送った。

「いいけど、教える見返りは？」

理解が難しいような、摩訶不思議な言葉が口にされた。本人は至つて平静、にこやかに笑っている。

「み・か・え・り・だよ。わかんないかな？ MIKA - ERI、ぎぶ・みー・さむしんぐ・ばっく、戻し入れ、キャッシュバック・・・」

「・・・では、どの様な見返りを求めなのでしょう」

その表情にいつもの笑みを戻して、レムリアが尋ねた。

「そうだね、夢見姫。キミがボクと一晩付き合うことでもいいよ」

「一晩、お付き合いするのですか？」

「そう。そのとーり」

さしものレムリアも、苦笑いを浮かべて言った。

「別の条件をお伺いした方が宜しいでしょうね」

「駄目なのかなあ？」

「駄目でしょう」

「そつか。なら、情報提供しない」

「それは、困りましたわ」

「だろ？ だからさ、解決策は簡単だよ。一晩、ボクと一緒にいるだけさ」

「・・・倫理観の問題かと思うのですが、貴方にはそのような概念はありませんの？」

「気分次第だね。もっとも、貴女みたいな美人を目の前にして、何もしないというのは僕の理念に反するよ」

「理念・・・ですか・・・」

“賢女”の誉れも高いレムリアが、珍しくも“困りました”という表情を浮かべた。

「・・・サリアン殿。もしも私やレムリアのことを試すつもりなら、そのくらいにしておいてください」

唇の端に皮肉っぽい冷やかな微笑みを浮かべて、エリアドが合いの手を入れた。

「まあ、言葉通り、『あなたがレムリアと一晩一緒にいるだけ』なら、私はかまいませんけれどね。むろん、私はその言葉以上のことをさせるつもりはありませんし、その場には私も一緒にさせていただきますが。」

『この世界と彼女とどちらが大切か？』なんて野暮なことは聞かないでください。私には、どちらも大切なものなのですし、まだ、この身を“闇”に投じるつもりはないのですから」

少しだけ考える振りをすると、エリアドは良い考えが浮かんだとも言っように続けた。

「・・・そうですね。代わりに、私が一晩お相手する。などという条件ではいかがですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6066o/>

封印の門

2011年10月5日02時19分発行